

下関再発見



平成30(2018)年9月15日

村川 淳一

下 関 再 発 見 目 次

	頁
(その1)唐戸・西之端・奥小路(2013年7月31日)	2
(その2)西之端・唐戸・平家塚(2013年9月29日)	5
(その3)唐戸・稻荷町・平家塚・三百目(2014年2月16日)	10
(その4)西之端・唐戸・中山寺・観音崎(2014年4月28日)	16
(その5)唐戸・阿弥陀寺町(2014年8月10日)	22
(その6)本行寺・藤原義江・光明寺・高杉晋作(2014年10月23日)	28
(その7)唐戸・長府(2015年5月24日)	37
(その8)東行庵(2015年5月31日)	45
(その9)角島(2015年10月29日)	52
(その10)彦島(2016年7月24日)	60
(その11)中山神社・本宮中山神社(2016年11月8日)	66
(その12)先帝祭・船戸与一・長府(2017年7月2日)	73
(その13)金子みすゞ(2017年11月26日)	81

(その1) 唐戸・西之端・奥小路(2013年7月31日)

はじめに

福岡市と北九州市で7月29日(月)に仕事があったので、7月27日(土)午後～28日(日)午後の間、下関の実家に寄りました。下関の皆さんにとっては何の変哲もないことと思いますが、私は実に新鮮な発見をしました。

1 唐戸の「河久」に行列が出来ていなかった

「ふくさしづっかけ丼」(880円)を初めて食べたのはTVの旅番組で知った約5年前でしたが、去年の4月と10月に帰ったときは、やはりTVで紹介されたあとだったので、行列が出来ていて食べられませんでした。

今回は5～6人しかお客さんがいませんでしたので、ゆっくり頂けました。美味しかったです。予約すれば、鯖の燻製がお土産として買い求められますが、これも絶品です。



2 「下関B級ぐるめ村」ができていた

河久の傍にできていました。ドクター・キッスフィッシュが群がって美人の足をつついていました。気持ちよさそうですが、1,000円はちと高いのでは？



3 海響館の隣に遊園地ができていた

「はい！からっと横丁」というそうですが、夏休みが終わった9月中旬にオープンするそうで、なんと戦略的な頭脳のない人たちが考えたオープン時期です。下中の写真は、二階建てロンドンバスルートマスター(1962年製)で、平成20年4月～平成25年3月の間、市内を走って、退役しました。



4 市役所を新築していた

現在の場所に新築するという主張をして、現中尾市長が当選されたそうですが、住んでいない私としても安心したような感じです。



5 「奥小路」の地名の根拠を確認した

この石碑はよく目にしていましたが、説明文を初めて読みました。

「海岸部の開けた位置に比し、奥まった所にあることからつけられた地名で、山陰方面から来た商人が通った道である。平成2年3月吉日 下関市」とありました。



6 「貴船町」の正式な呼び方を知った

私は言葉を覚えて以来ずっと、「きふねまち」と呼んでいましたが、今回、標識を見て初めて正式には「きぶねまち」であることを知りました。なぜ、今まで気付かなかったのか不思議な気がします。



7 本行寺の戦死者の碑を初めて参拝した

実家の菩提寺は赤間町の教法寺で、父が、昭和53(1978)年12月30日に亡くなってからこの寺の納骨堂に眠っています。7月28日(日)に唐戸から高速バスに乗って博多に行く前にお参りしました。その前に、隣の本行寺を訪問しました。何十年もこのお寺の前を通っているのに、境内に入ったのは初めてでした。

山門をくぐると、左手に戦死者の慰霊碑がありましたので、大東亜戦争の慰霊碑かなと思って裏を見て驚きました。元治元(1864)年の建立なのです。建立者はよく読みませんでしたが、向かって左の墓碑銘にある井上某であったような気がします。

「帰宅してからネットで検索すれば分かるだろう」と思って、ろくに調べもせずに帰宅しましたが、この慰霊碑やお墓の説明がネットで見当たりません。今となってはメモをして帰ればよかったと悔やまれます。



村川家の菩提寺教法寺で起きた「**教法寺事件**」は、平民の**奇兵隊**と士族の**先鋒隊**(せんぼうたい)の対立の結果、文久3(1863)年8月16日夜、血気に逸った奇兵隊々隊士が先鋒隊の宿舎教法寺を襲った事件です。その際、全員逃げたのですが、病気で寝ていた**蔵田幾之進**が惨殺されました。**高杉晋作**は、内ゲバを防げなかった責任を感じ、死を覚悟しましたが、その翌日、先鋒隊々隊士が、奇兵隊夫卒頭の**奈良屋源兵衛**を腹いせに殺害しました。教法寺事件は、8月26日、責任者とされた奇兵隊々隊士・**宮城彦輔**の切腹で決着しました。

8 入江和作の邸宅は西之端にあったことを知った

この記念碑は、最近できたものだと思います。初めて発見しました。**入江和作邸**は、坂本龍馬が下関に来て最初に訪れた場所ですが、この場所にあったことを初めて知りました。**入江家**は酢の醸造業を営む豪商で勤皇の志に篤く、**晋作**など多くの志士を物心両面で支援しました。**おうの**の面倒も見ました。



おわりに

次回の帰郷時にはどんな対象に出会えるのか、実に楽しみです。

この歳で未だに「わくわく」できる時間を持つことを、幸せに感じています。

(おわり)

(その2)西之端・唐戸・平家塚(2013年9月29日)

はじめに

前回と同様、福岡市と大分市で仕事があったので、9月20日(金)夕～24日(火)朝の間、下関の実家に寄りました。今回も私にとって新しい発見をしました。

1 林芙美子(1903～1951)の生誕地を知った

8月末に田中町の桃崎病院に入院した母(90歳)を見舞うため初めて同病院に行ったら、隣に「林芙美子生誕地」の石碑がありました。五穀神社の鳥居の傍です。林芙美子の石碑があるとは聞いていましたが、ここにあることは知りませんでした。五穀神社の存在も知りませんでした。



神社の解説板によると次のとおりです。前回、貴船町を「きぶねまち」と呼ぶことを初めて知ったと書きましたが、名称が「貴布祢」から来ているのであれば、元々は「きふね」という町だったのでしょ。太古の時代、田中町の平地は唐戸湾の入り海で、川の土砂が堆積して川原になり、やがて土地や畑ができた。田の中を流れる田中川は、大雨が降るとしばしば氾濫したため、水の神様(高甕神:たかかみのかみ)、稲の神様(倉稻魂命:うかのみたまのみこと)、五穀の神様(保食神:うけもちのかみ)が祀られた。神社の土地は、昔の地名を中島(なかのしま)といい、川原の中の島で、ここに寛政11年*に神社が建立された。正式には貴布祢神社**という。

注:* 1799年。** 観光地図を見ると丸山町にも貴布祢神社がありますね。

2 「はい! からっと横丁」がオープンしていた

9月14日(土)に営業開始したそうです。22日(日)の10時半ころ覗いてみましたが(入場は無料)、人が少なく、暗い気持ちになりました。観覧車は700円ですが、クーラー付であり、やむを得ない料金だと言えるでしょうか。

13時過ぎに外を歩いていて驚きました。東駅から唐戸に向かう県道57号が大渋滞、長府から唐戸に向かう国道9号線も同様でした。

これで他事ながら安心しました。



3 西之端の地名の由来を知った

東京第一ホテル下関の坂を下り、懐かしい喫茶「こいぬ」(写真下左)から県道 57 号に出る道路を「西之端通り」と呼ぶようで、石碑が立っていました。「明治 22 年の市制施行時、市域の西の端にあたる町の幹線道路として利用された 平成 2 年 3 月吉日 下関市」とありました。

現在の下関市街地の中心のような場所が赤間関市の西の端であったとは驚きです。これで、西之端という地名の由来も分かりました。



4 桃太郎の天ぷらうどんを食べた

何十年振りだったでしょうか。桃太郎の天ぷらうどんを食べました。お店に入るときに、360 円は安過ぎると思いましたが、出てきたものを見て驚きました。網状の天ぷらに数匹のオキアミ(?)が乗っていました。母に聞きましたら、昔からそうだったとのことでした。完全に私の記憶から消えていました。

お稲荷さんは 2 個で 140 円です。昔は、唐戸のうどん屋さんといえば桃太郎しかなかったですよ。ね。



5 平家塚を参拝した

私が勤務している団体に N さんという理事がおられます。大阪に本社があり、全国展開されている「S ピザ」の代表取締役社長です。N さんは竹崎の御出身だそうですが、御先祖は平家の落人だそうです。前田砲台脇から野久留米街道に入り、今の長府向田町の団地がある場所を含めた一帯に平家部落がありました。向田町の団地地域では、昔は N さんのお宅が 1 軒だけだったそうです。

この日は、NPO 団体理事の N さんの車に乗せていただいて訪ねました。すると、右側に見える団地の反対側に、「平家塚」という表示がありましたので、団地の方向に右折しても N さんのお宅は発見できそうにもないと思い、左折して狭い道に入って行くことにしました。

「Uターンすると車が落ちちるかもしれないよ」と道路脇の家のおじさんに脅かされつつ上っていきますと、平家塚は、峠の右側にありました。

塚に向かって右側に「平家塚・霊神社はこの上です」という石柱が立っていたのですが、たいへん暑い日でしたので横着をして登らず、塚を拝み、写真を撮っただけで帰りました。

おじさんの言葉に反して、峠にはUターンに十分な地積がありました。平家一門の皆さんに悪いので、次回来たときは山を登って参拝したいと思います。



6 旧秋田商会ビルを初めて訪れた

金子みすゞ(1903~1930)終焉の地の碑が明治安田生命ビル裏にあることを知り、訪ねることにしました。旧秋田商会ビル前を歩いていると、自由に中に入れることが分かり、早速入ってみました。

御存じない方はおられないと思いますが、右写真の右側です。左側もおなじみの、国内最古の現役郵便庁舎(明治33(1900)年建築)である南部町(なべちょう)郵便庁舎です。

旧秋田商会ビルは、現在下関観光情報センターになっており、こちらは大正4(1915)年建築です。

1階には、下関の歴史的写真などが陳列されており、奥の小部屋には、金子みすゞ関連展示がありました。下左写真は彼女が自殺する前日の昭和5(1930)年3月9日に写真撮影したカメラで、その右の写真は、最後の写真と亀山八幡宮鳥居左脇にあった三好写真館(最後の写真を撮った写真館)の建物です。



右写真は3階の大広間です。建物内には、手動エレベーター(ダムウェイターという食事運搬用のもの)、水洗便所、手まわし洗濯器、明治38年創業時から使用していた金庫など、貴重な物を見ることができました。屋上庭園は建物老朽化のために入れません。

旧秋田商会ビルを出て、金子みすゞ終焉の地の上山文英堂本店跡を訪れました。「みんなを好きに」の詩碑がありました。



7 本行寺の戦死者の墓を再び参拝した

前は時間がなくてゆっくり観察できませんでしたが、今回はゆっくり観察しました。

まず中央は「戦死之塚」と記されており、境内に向かって右面(写真下左)には「元治元 甲子八月六日 三番小隊 北島保助」とあり、裏面には「同年同月五日 福田直右衛門 順海房 同年同月六日 福田弥太郎 松江安右衛門 森脇三左衛門 町田道之助」とありました。

また、境内に向かって左面(写真下右)には「鷹懲隊 同年 同月六日 山本泰藏 水津惣之助 森重菊次郎 藤田吉作」と刻まれていました。鷹懲隊以外は隊名が書かれていませんが、ほぼ奇兵隊に間違いありません。



長州軍は、元治元(1864)年8月5日 15:40、四ヶ国海軍に対して砲撃を開始しましたが、艦砲射撃で制圧されました。17:30に砲台から兵員が撤退したのち、英陸戦小隊が上陸して砲の火門に釘を打ち、引き揚げました。そして報復措置として8月6日午前9時、四ヶ国連合軍2千名が上陸しました。8月5日と8月6日の戦死はその際のものと思われます。

これを書きながらネットを調べましたら、「自然堂～幕末史蹟訪問」に墓碑の内容が紹介されていることが分かりました。中央の墓碑の内容が何ヶ所か間違っています。ただし、私は18体の小さなお墓についてはほとんど名前を記録して来ませんでしたので(蔦がからまって読めないものもあります)、ネット記事に依ります。お墓の位置は、この記事と同じにして記していきます。

A	B	C		E	F	G
H	I	J	D	K	L	M
N	O	P		Q	R	S

境内

A: 村上小次郎源周徳之墓 於豊前大里戦死 慶應二年丙寅七月廿一日

B: 関口彌太郎兼房墓 豊前國馬寄戦死 慶應二年丙寅月廿七日於

C: 隅次郎秀光之墓 奇兵隊兵員周防山 本谷人 元治三年丙寅七月廿七日戦死 干豊前赤坂年朋友中建之

H: 大枝八郎義兼墓 豊前國曾根戦死 慶應二年丙寅八月廿一日於

I: 武林次郎義一墓 奇兵隊 明治三庚午二月二日 於豊浦病死年二十二

J: 重富秀之進墓 奇兵隊 元治三丙寅七月廿七日 於豊前國赤坂戦死

N: 山田鵬輔源成功墓 友人 前田光 建立 慶應二年寅七月廿七日 豊前國於大里戦死

O: 飯田梅之丞墓 於田之浦戦死 慶應二丙寅歳六月十七日

P: 井上収蔵 慶應二年十月四日 豊前國今村於戦死

E: 中村水穂墓 豊前赤坂戦死 慶應二年丙寅七月廿七日

F: 阿部宗兵衛吉光墓 豊前國大里戦死 慶應二年丙寅七月廿七日於

G: 森永光之進一正墓 豊前國大里戦死 慶應二年丙寅七月廿七日於

K:山本宗之進義明墓 豊前國富野臺戦死 慶應二年丙寅七月廿七日於
L: 澄院了儀日聞居士 奇兵隊廣瀬徹和儀之墳 明治元年戊辰九月十八日(以下略)
M:八幡隊 飯沼三十助元春 慶應三年下柳正月廿七日
Q:木原四郎正憲 八幡隊 行年十九才 慶應丙寅歳五月十八日
R:八幡隊 中川源太郎隆重 慶應二年寅十月四日 於豊前戦死
S:八幡隊 行年廿三才 山下豊吉源信春 慶應二年丙寅十二月十八日 於豊前戦死

C及びDの「元治三年」は、「慶應二年」の誤りです。元治は2年(=慶應元年)まででした。Bの不明月は7月と思われます。

慶應2(1866)年6月5日、幕府の**第二次長州攻撃**が開始され、長州は大島口、芸州口、石州口及び小倉口の**四境戦争**を戦いましたが、小倉口の戦闘が最も激烈でした。慶應2年6月17日未明、長州軍(高杉晋作指揮の奇兵隊と長府藩兵。坂本竜馬も参加)は門司ヶ関と田ノ浦に砲撃を開始し、砲台を奪取して引き揚げますが、即死者は海軍2名、陸軍3名で、そのうちの1名がOの**飯田梅之丞**だと思われます。

7月27日、長州は総力を挙げて**大里付近**に上陸しましたが、背後から幕府の艦砲射撃を受け、かなりの損害が出たようです。このお墓のうちの8名がこの日に亡くなっています。

おわりに

次回はいつ帰郷できるか分かりませんが、またどこかを散策してみたいと思います。

(おわり)

(その3) 唐戸・稲荷町・平家塚・三百目(2014年2月16日)

はじめに

8月30日以来、股の亀裂骨折で桃崎病院に入院している母(90歳)の見舞いのため、2月9日(日)夕~12日(水)昼の間、下関の実家(貴船町1丁目の借家)に帰りました。予定した8日(土)の飛行機が降雪で飛ばず、翌日の新幹線で帰りました。「下関再発見シリーズ」も前号で終わったかと思っていたのですが、意外にも新しい発見があり、続編をお送りすることになりました。

1 Sさんとの出逢い

2月9日(日)20時過ぎ、実家の風呂釜の調子が悪いため、噴泉湯に行きましたが、廃業したのか閉まっていました。近くの風呂屋は知りませんし、大晦日に福岡の妹夫婦が母を長府の温泉に連れて行ったと聞いていたので、携帯電話で場所を聞くと、「御裳川にある」と言いますので、寒さをこらえながら、粗末なジャージ姿で洗面器を抱え長府方面行きの唐戸バス停に行きました。

バス停に熟年の男女がいたので、「御裳川に温泉はありますか？」と聞きましたら、男性が「ありませんよ。遠くまで行けばマリノランドがありますが、遠いし、入湯料が高いですよ」と言います。女性が「どこにお住まいですか？」と聞くので「赤岸の実家です」と言うと、どこかに走って行き帰ってきて(あとで聞いたら、わざわざ電話帳で調べてくれたことが分かりました)、「辨天湯が21時30分まで開いているそうです。私も赤岸なので、この男性を見送ったら、御案内します」と言ってくれました。下関の人は親切です。以下は、男性が長府方面行きのバスで帰るのを見送ったあとの歩きながらの会話です。

「私はSといいます。時計屋です」「私は村川です。森川米穀店の故賢次君と同期です」「奥さんはHさんですよ。私は2年下です。日新には、Yさん、野球の上手なFさんがいましたね？南高ではKさんがいました」「Y君は八王子、F君は川崎、Kさんは名古屋に住んでいます。皆さんとはよく会います。Kさんは未だに美貌を保っていますよ」

「長州鉄道は御存じですか？」「いいえ、知りません」「今日はグループで東駅から幡生まで歩きました。結構な距離がありましたよ。そろそろ辨天湯ですが、この階段(写真右)の上に山本譲二さんの家があり、子供の頃、辨天湯に来ていました。」



山本讓二さんは今、棕野に住んでいます。私は実家に内湯がなくて子供の頃に辨天湯に来ていましたが、**稲荷町の芸者さん**がいつも大勢来ていて、お菓子を貰った思い出があります。村川さんは日新の生徒会の役員をしていませんか？」「体育部長をやりました(Sさんの記憶力はすごい!)」「ここが辨天湯(前頁右下写真)です」「今日は有難うございました。助かりました！」。

2 稲荷町界隈と稲荷神社

辨天湯への途中、Sさんが、子供の頃の稲荷町の様子を話してくれましたので、翌日、行ってみました。稲荷町の町名は、**平安時代の大同4(809)年に建立された稲荷神社(末廣稲荷神社)**に由来します。**日本の廓の発祥の地**といわれ、数々の名妓や妓楼の名とともに、稲荷町の名は全国に知られました。遊女の中には平家生き残りの官女の血を引く者も多く、格式の高い花街として有名でした。**高杉晋作の愛人おうのは**、堺町の芸妓で、源氏名を**此の糸**といい(芸妓と遊女には差があり、源氏名という表現は芸妓に使われ、遊女には使えません)、**三味線師匠**でした。また、赤間関は江戸時代初期頃から**北前船**の寄港地となり、**井原西鶴**、**十返舎一九**、**頼山陽**らの文人・墨客が多数訪れました。幕末には、**高杉晋作**、**坂本龍馬**、**伊藤博文**ら若き志士たちが訪れました。

稲荷神社は赤間関最古の神社で、御祭神は**倉稲魂神(うかのみたまのかみ)**です。商家の崇敬が篤く、赤間関の繁栄と守護の神として信仰されてきました。昭和20(1945)年の空襲で焼け、昭和28(1953)年に再建されましたが、老朽化のために、昭和61(1986)年にコンクリートの新社殿となりました。



3 長州鉄道について

Sさんが**長州鉄道**の話がされたので、自宅に帰ってからネットで調べました。ウィキペディアによると、明治44(1911)年に**長州軽便鉄道**として**豊浦郡生野村(東下関付近)**と**大津郡深川村(現在の長門市深川町)**を結ぶ免許を得たのに始まり、**長州鉄道**という名称で会社を設立し、大正3(1914)年に**東下関～小串間**を開業しましたが、資金難でその先の建設が頓挫してしまいました。

私は子供の頃から、「なぜ、市内電車の駅が、東駅という鉄道の駅のような名称になっているのだろう?」と思っていましたが、これは、「東下関駅」の略称だということが分かり、納得しました。

やがて大正 14(1925)年、幡生～小串間が国鉄に買収され国鉄小串線となりました。残ったのは東下関～幡生間の 2.3km で、長州鉄道は伊那電車軌道(現在の JR 飯田線)から車両を買って、昭和元(1926)年から営業を開始しました。

いっぽう、昭和元年から営業を開始した山陽電気軌道(現在のサンデン交通)という会社がありました。同年 12 月 25 日に松原～壇ノ浦間が開業したのが最初でした。この頃長州鉄道は、市内循環鉄道の構想を立てて免許を獲得しましたが、両社共通の出資者が多かったことから、昭和 3(1928)年に長州鉄道は山陽電気軌道に吸収され、長州鉄道は短い歴史の幕を閉じました。

ネットから引用させていただいた下の写真は、昭和 37(1962)年 6 月 17 日の東下関駅(東駅)の様子です。線路を挟んで右に駅舎、左に電車の車庫とバスの駐車場が見えます。下関西高の 1 年生として通っていたときに見ていた風景です。



同じくネットから引用した上記と同じ日の写真です。下左は東駅から山の口方向を見たもの、下右は、終点の幡生駅です。



4 フランシスコ・ザビエルが唐戸に上陸したことを知った

唐戸市場と門司港行き船着き場の間で、「フランシスコ・ザビエル上陸記念碑」を見つけました。実は、1 月 18 日(土)の増田隊長率いる「高尾山登山隊」の登山中の雑談の中で、誰かが「君の奥さんが小野田のサビエル高校出身だ。俺はサビレル高校だと冷やかしているんだよ」と言っていましたので、実に不思議な出会いでした。

記念碑によると、ポルトガルを出て8年後の天文18(1549)年に鹿児島島に上陸し、西国の覇者大内義隆に会うために、天文19(1550)年に平戸を経て、10月末～11月頃に下関に上陸しました。彼は、翌年の天文20(1551)年3月にも山口を訪れ、大内領内での布教を許されました。天正14(1586)年に下関にも教会堂が建てられ、キリスト教布教の一拠点となりました。

そういえば前日、母が90歳になるまで営んでいた魚屋の敷地を借りていた、新町4丁目の地主さんのお宅に伺い、昨年亡くなった奥さんの祭壇にお参りましたが、御主人も奥さんもキリスト教徒でした。



5 平家塚と霊神社にお参りした

昨年9月22日、平家塚に手を合わせずに写真を撮ただけで、しかも山の上の霊神社(れいじんじゃ)には、横着をしてお参りせずに帰りました。「そのせいで翌朝、良性発作性頭位めまい症を発症したのではないか？」との疑念が去りませんでしたので、今回はしっかりお参りしました。これで治ったわけではありませんが、少なくとも「平家の怨霊に取りつかれている」との疑いは晴れ、気が楽になりました。とにかく、救急車で下関市立市民病院に搬送され、翌日は特攻隊員になったような気持ちで大分に仕事に行きましたが、猛烈にきつかったです。

平家塚の石碑の右側の坂道を登っていくと、右手に荒れた墓群(写真下)に出会いました。説明板には、こう書かれていました。

「山あいの里、高畑は壇ノ浦の合戦で滅んだ平家の落人が隠れ住んでいたところといわれているが、ここは、その落人の墓と伝えられているもので、古い五輪塔6基ほかの墓石がある。

登り道の反対側にも2基、また、切り通しの市道の向う側にも4基あり、どの墓も、すぐ前の青い海を丘の上からじっと眺めているようである。ここは「平家やぶ」ともいわれ、かつてはここに一步でも入るとふるいがつき、たたりがあると恐れられていたが、いまは月一回地元の婦人たちの手で清掃され香華が手向けられている。



坂道を登り切ると**霊神社**(写真右)が現れました。「昼なお暗し」といった場所です。登り口(市道脇)に平家塚があり、その傍に神社があったのですが、明治中頃の大火でこの地に移設されたそうです。

左右一対の灯籠がありますが、建立年号は寛政元(1789)年ですから、江戸時代後期の古いものです。

現在も、春(2月)と秋(9月)の2回、海山の神饌を供えて祭りが行われていると、説明板に書かれていました。



6 本陣伊藤邸跡と坂本龍馬の写真

今回は素通りしたのですが、下関駅方向のバス停「赤間神宮前」の国道9号線を挟んで陸地側に「**本陣伊藤邸跡**」という表示があります。「伊藤博文の関係かな？」などと思っていたものですが、そう思って行ったら、**坂本龍馬**の写真に出会い、かなり得をした気持ちになりました。この写真は初めて見ました。説明板によると、次のとおりです。

伊藤家は鎌倉時代からの旧家で、**室町・江戸時代**には下関の指導者的な地位にあり、この地に広大な邸宅を構え、室町時代には、下関の交通・流通などを掌握して、朝鮮との交易も行っていました。次いで、江戸時代には大年寄として町政を司りました。また、本陣を設けて、九州諸大名の参勤時の休泊所となり、各藩の用達も行いました。特に**対馬宗氏**とは親密な間柄でした。

伊藤家は**オランダ宿**としても有名で、江戸に参府するオランダ商館長は、伊藤家と**佐甲家**の二つの本陣を下関の定宿としていました。歴代当主は進取の気性に富み開明的でしたが、特に文化・文政期の当主、**空之允盛永**(もくのじょう・もりなが)は熱烈なオランダ趣味の持ち主で、「ヘンドリック・ファン・デン・ベルグ」というオランダ名を名乗り、ゾーフ、プロンホフなどの商館長と親しく交際しました。佐甲家に宿泊した商館医の**シーボルト**も空之允から歓待されました。

また、幕末の当主**空之助**(静斎(せいさい))は**吉田松陰**と交際し、**助太夫**(すけだゆう)(**九三**(きゅうぞう))は、**真木菊四郎**や**坂本龍馬**を支援しました。慶應2(1866)年～慶應3(1867)年頃の**坂本龍馬**は、助太夫の物心両面の手厚い支援のもと、伊藤家を拠点として活動しました。

下左写真の手前に立て札がありますが、伊藤邸は明治5(1872)年6月に**明治天皇**の西国巡幸時の行在所となり、本陣としての最後の役目を終えました。



本陣伊藤邸は、龍馬とお龍が生活したところでもあります。説明板によると次のとおりです。

龍馬と助太夫の関係は、慶應元(1865)年、龍馬が薩長同盟実現のために下関を訪れたときから始まりました。以後、龍馬は伊藤邸を下関の寄宿先とし、慶應3(1867)年2月10日から、同邸の一室「自然堂」を借り受け、愛妻お龍と暮らし始めました。

同邸での生活中、龍馬の朝帰りにお龍が激怒したこともあったそうですが、夫婦で歌会に参加するなど、仲睦まじい夫婦だったようです。



お龍
天保12年(1841)～明治39年(1906) 写真提供 井橋 直美氏

7 日本一大きな交番？海峡交番

「三百目」のバス停から海岸の方向に行ったところに、どでかい交番がありました。「海峡交番」と表示されていました。「これは日本一大きな交番ではないか」と思いましたが、念のために自宅に帰ってネットで調べました。

やはりこれの経緯を見ると、ただの交番ではありませんでした。以下のネット記事を読めば、大きな交番の謎は解けます。



明治18(1885)年8月11日、赤間関警察署南部町巡查派出所(現在の下関警察署唐戸交番)が、水上警察の事務を兼掌。

その後、水上警察派出所を経て、赤間関警察署赤間関水上分署に昇格。

明治29(1896)年4月1日、赤間関水上警察署に改称。

明治35(1902)年6月1日、赤間関市が下関市に改称したため、下関水上警察署に改称。

平成18(2006)年4月1日、山口県警の再編整備計画に伴い、下関水上警察署を下関警察署に統合。庁舎は下関警察署の分庁舎となり、庁舎内に下関警察署海峡交番を設置。

おわりに

次回はいつ帰郷できるか分かりませんが、こうなると、新発見はまだまだ続きそうです。またどこかを散策してみたいと思います。

(おわり)

(その4)西之端・唐戸・中山寺・観音崎(2014年4月28日)

はじめに

昨年8月30日以来、股の骨折で入院していた母(90歳)が4月18日(金)に退院しましたので、その支援と介護態勢確立のために、カミさんと4月17日(木)~22日(火)の間、下関の実家(貴船町1丁目)に帰りました。母は手押し車で歩いていますが、すぐに畑の草取りをできるまでになりました。

前号に登場したSさんの御自宅(S時計店)は、実は私の実家から50メートルくらいしか離れていませんでした。唐戸から帰る途中、赤岸通りを歩いていて何気なく左を見たら、なんとお店があるではありませんか！

Sさんとは2ヵ月振りの出会いでした。一緒に暮らしておられるお母さんは95歳ですが現役で、若くお元気でした。私の母とは、以前から唐戸市場で挨拶はしていたものの、お互いに名前や家の場所は知りませんでした。私がSさんと偶然出会ったお蔭で、お近づきになれました。

1 噴泉湯は健在

2月9日(日)夜に噴泉湯に行ったときは閉まっています。「潰れたのか」と前号で書きましたら、日新中同期生の田鍋裕三君から、「それは僕の祖父の田鍋米五郎が開いた風呂屋だと思ふ。近くの階段を上ったところに実家があったよ」というメールが来ました。意外な事実でした。4月17日(木)夕に前を通りましたら、営業していました(写真右)。日曜日が休みなのでしょうか。でもSさんと会えたのは、その日に閉まっていたからなのです。



2 「唐戸まつり」の賑わい

4月19日(土)に、カミさんと唐戸市場に行きました。唐戸まつりをやっていて、大賑わいでした。限定300食、200円のふく鍋は、11時販売開始後すぐに売り切れました。市場の中は、単品のにぎりを自由に選んで購入する客でごった返していました(写真下右)。海鮮丼を食べましたが、ウニ・いくら丼、サーモン・ウニ・イクラ丼とも1,000円でお値打ちでした(写真下中央)。20日(日)も行われましたが、あいにく雨模様でしたので、お客さんの出足は鈍ったことでしょう。



市場の近くの特設ステージでは、カラオケ大会が行われており、海辺のデッキでは女性の猿回し(写真右)もやっており、比較的賑やかでしたが、唐戸市場内及びその隣の賑わいとは対照的に、海響館の隣の遊園地、「はい！からっと横丁」には、ほとんど人がいませんでした。

よそ事ながら気になりましたが、やはり、下関の人口の限界だったのでしょうか…。



3 介護支援事業所

済生会病院が移転し、**介護支援事業所**になっていました。貴船町3丁目にあります。母はデイサービスを受けるために、週2回ここに通っています。

驚いたのは、ケアマネージャー、ソーシャルワーカー、生活相談員、住宅改造・介護支援器材会社社員など多くの方が、二、三日の間に、驚くべきスピードで対応してくれたことです。帰京した4月22日(火)には、すでにリースの電動ベッドが入りました。



4 中山寺(ちゅうざんじ)の十一面観音

約十年前にTVで、**王江小学校(田中絹代が小学校1~2年生の間在学)**近くの**中山寺**(写真下左)に**十一面観音様**が祀られていることを知り、気になっていたもので、4月19日(土)、同寺を参拝しましたが、前日に「**観音祭り**」が行われたものの、当日は、金堂が閉まっていて拝観できませんでした。海岸方向からお寺に向かう参道の途中(王江小学校の向かい側)の右側の空き地に、赤レンガの塀(写真下右)が残っていましたが、これは何の跡なのでしょう？旧軍施設のような臭いを感じましたが…。



5 山口銀行旧本店(やまぎん史料館)

(1) 設立の経緯

4月20日(日)、国道9号線から1本内側の道を歩いていて、**観音崎**で「やまぎん史料館」を発見しました。右は、同史料館1階フロアにある展示パネルの写真です。

大正9(1920)年に銀行建築の名人、**長野 宇平治**の設計で三井銀行下関支店として建築され、昭和8(1933)年に百十銀行の本店となりました。そして、昭和19(1944)年に県下の六つの本店銀行である、百十銀行、華浦(かほ)銀行、船城(せんじょう)銀行、大島銀行、宇部銀行、長周銀行が統合されて山口銀行が設立され、本店となりました。昭和40(1965)年、下関駅近くに新本店が新築されてからは、**観音崎支店**となり、昭和44(1969)年、入江支店ができてから、**山口銀行別館**となり、昭和48(1973)年～昭和50(1975)年の間は**日本銀行支店**として使われました。そして、平成16(2004)年4月～平成17(2005)年3月の間、復元工事と耐震補強工事が行われ、平成17年10月に**山口県指定有形文化財**となりました。

因みに、百十銀行は、第百十番目の国立銀行として明治11(1878)年に山口に設立され、明治12(1879)年に赤間関支店を開設し、明治13(1880)年に本店を下関に移しました。

写真右は、やまぎん史料館1階フロアにある展示パネルです。明治末期の写真だそうです。場所は現在の**明治安田生命**があるところです。百十銀行本店の左に少し写っているのが**上山文英堂本店(赤矢印)**で、**金子みすず**はここから西之端の商品館内にあった**上山文英堂支店**に通っていました。



(2) 史料館内の様子

玄関を入ると、鮮やかな**亀甲タイル**が目に入りました(写真下左)。創建された大正9(1920)年のもので、カーペットの下に隠れていたために、非常にきれいに残っています。因みに、玄関以外の床の亀甲タイルは、復元されたものです。建物内部は、細部にわたって非常に精巧に過去の形状が再現されています(写真下右)。



(3) T館長との出会い

旧本店の奥に、別棟の新しい建物(4階建ての**展示棟**)がありました。1階の**人間国宝 三輪休雪**などの見事な萩焼の数々を拝見していたら、**T館長**が説明に来られました。今回も大収穫でした。以下は、同館長が説明された内容です。

萩焼について

萩焼は、**豊臣 秀吉**が朝鮮出兵した際、**毛利氏**が朝鮮の陶工を連れ帰ったことから始まりました。釉薬の掛け具合や釜の温度によって生ずるひび割れ、**貫入**(かんにゅう)が特徴です。萩焼には陶器も磁器もあり、陶器は粘土を低い温度で焼き、磁器は長石を含んだ土を高温で焼きます。

(十一代、十二代及び十三代休雪の作品を説明していただきました。いちばん奥にある十三代休雪の作品、三層の陶器の城の前面に金を張った「**卑弥呼の城**」は、エロスと人間の一生を表したものだそうです。細部説明を文章にすることは憚られますので省略します)

大内塗について

(2階の展示場に**大内塗**と**赤間硯**がありました)

経済産業省が指定する「**伝統的工芸品**」は全国で約210件あり、**山口県**では、**赤間硯**(文具)、**大内塗**(漆器)及び**萩焼**(陶磁器)が指定されています。大内塗は、**秋草模様**と大内氏の家紋「**大内菱**」が金箔で入っているのが特徴です。

赤間硯について

硯の墨液が溜まるところを「**硯の海**」といいます。下関では、**関門海峡**のことを、硯に見立てて「**硯の海**」と呼びます。下関南高の校歌に「**硯の海**」という歌詞がありますが、同校在校生でその意味を知る人は少ないようです(日新中から南高に進まれた皆さん、いかがですか?)。

屋上の芝生庭園にて

(関門海峡の見事な景色を眺めたのち)**観音崎**の地名の由来は、**大内氏**の先祖に由来します。**百済の聖王の第三皇子琳聖太子**(りんしょうたいし)が、防府を目指して航行中に関門海峡を通ったとき、あまりの景色の美しさに、この地に途中上陸し、(後方を指さされ)この後の山の上に観音様を祀りました。お堂は戦災で焼けてしまいましたが、これが観音崎の地名の由来です。琳聖太子はその後、防府の**多々良浜**に上陸し、**多々良姓**を名乗りました。その後大内氏を名乗ったとされていますが、それは大内氏が言っているだけで、裏付けはありません。

観音様のお堂があった左側に**永福寺**があります。その階段を下りた所が、**旧山陽路の終点**です(写真下左)。**明治安田生命ビル**の表側に**高橋 是清**の記念碑(写真下右)があります。これは、**第一百銀行**が負債を抱えたのを、高橋是清の力で**日本銀行**から融資を受け、その代わりに建物を日銀に譲り渡して出たことに由来します。そして是清が、明治26(1893)年9月に初代**日銀西部支店長**になりました。日銀の支店は**東京**、**大阪**に次いで全国で3番目で、下関は重視されていました。



3階展示室にて

(夏目雅子の写真を前に)彼女が19歳の昭和52(1977)年から8年間、山銀のマスコット・ガールでした。当時は無名でした。その後、防府市出身の伊集院 静と結婚し、後付けで山口県ゆかりの人となりました。今のマスコット・ガールは山口市出身の卓球選手・石川佳純(いしかわ・かすみ)さんです。

(山口銀行機関誌を前に)司馬遼太郎「街道を行く」の長州路部分の文章に、「山口県の銀行の人が私を訪ねて来た」と書かれていますが、これは「峠」で司馬が長州人のことを詳しく書いていたので、彼が山口県に来た機会を捉えて取材に行ったときのことを言っています。そのときの取材記事です。

6 下関駅前が変わる

新しい駅ビルが出来ていました(写真下左)。旧駅ビルの屋根をかたどったデザインが採用されています。また、ロータリーが新しくなろうとしています(写真下右)。



7 旧英国領事館の保存修理工事完了

何年間工事用の塀に囲まれていたのか、記憶がありませんが、とにかく長い期間だったと思います。年度末で保存修理工事が終了し、その塀が取り払われていました。

扉が閉まっているようでしたので、傍には行きませんでしたので、一般公開されているかどうかは分かりません。



8 唐戸ロール

4月20日(日)夕、カモンワークの「からと屋」で飲み、最後に、前回食べた手巻き寿司を頼んだらメニューからなくなって、**「唐戸ロール」**という新作メニュー(写真右、900円)が出ました(一切れ食べてしまいましたが5切れです)。マグロ、サケ、ハマチ、エビ、キュウリ、シソを御飯、海苔、大根のかつらむきで巻いたものです。結構、美味しかったです。



からと屋から**海響館**方向を眺めた写真(下左)と**海峡ゆめタワー**のライトアップ写真(下右)です。海峡ゆめタワーの照明は、東京スカイツリーに引けを取りません。からと屋はだいたい、いつも賑わっていますが、毎度のことながら、窓の外の人通りが少ないのは気になりました。



おわりに

今度帰関するときに新しい発見があるかどうか分かりませんが、またどこかを散策してみたいと思います。

(おわり)

(その5) 唐戸・阿弥陀寺町(2014年8月10日)

はじめに

7月28日(月)に福岡市と北九州市で仕事がありましたので、25日(金)、26日(土)の二泊で、母(本日8月10日で91歳)の顔を見るため下関に帰りました。

このシリーズに登場していただいているSさんと話をしていた、また新しい事実を知りました。S時計店は、昭和34(1959)年に赤岸に移るまでは宮田町にあったそうで、日新中学同期生大平孝雄君の幡生工業柔道部で1期後輩の故魁傑関(放駒親方。西森輝門(にしもり・てるゆき)氏)のお宅が近所にあり、親しくお付き合いをしていたそうです。彼女には、「引接寺」、「与次兵衛の碑」の位置と、「李鴻章道」の存在を教えてくださいました。彼女は「下関歴史ウォーク」のメンバーだそうで、流石によく御存知です。前号で中山寺(ちゅうざんじ)のことを書きましたら、日新中同期生の岡田一馬君から「住職は小学校の同期生で、小さいころはよく境内で相撲を取ったよ」というメールが来ました。世の中狭いですね。

1 ふくさしぶっかけ丼

久しぶりに、唐戸市場傍の河久(かわく)で「ふくさしぶっかけ丼」(写真右。880円)を頂きました。

刺身は「真ふく」で、皮は「虎ふく」です。何故かといいますが、真ふくが安くて美味しいことと、皮に毒があって食べられないことから、虎ふくの皮を使っているからです。

「ぶっかけ」というのは、酢醤油を掛けてあるので、そう呼ぶのでしょう。このシリーズの初号で書きましたが、当店で扱っておられる「鯖燻」(鯖の燻製)も逸品です。



2 改装なった旧下関英国領事館

旧英国領事館が、7月18日(金)から再オープンしていました。改装するのに5年半もかかりましたが、Sさんが市役所に、「このような意義のある施設をいつまでも工事によって公開しないのはおかしい。下関の観光活動にとって非常なマイナスだ」と抗議したら、市の回答は、「一度で改装する予算がなかったので、5年半に分けざるを得なかった」というものだったそうです。本館(写真下左)の2階が喫茶店になっており、別館の喫茶店がなくなって、イベント会場ができていました(写真下右)。「写真でたどる駐日英国大使館の今・昔」という写真展が開かれており、興味深く拝見しました。



展示によりますと、明治 34(1901)年に駐日公使アーネスト・サトウの具申により、赤間町 26 番地に日本家屋を利用した領事館が開設され、明治 39(1906)年 12 月に現在地に新築移転したそうです。

展示内容に、「英国に留学した下関出身者」がありました。長州藩士・服部潜蔵は、慶應 3(1867)年に藩費留学し、海軍術を学んで英国海軍士官となり、明治 6(1873)年に帰国して、帝國海軍に海軍術を伝えました。同じく長州藩士・福原和勝は、明治 2(1869)年に留学し、明治 6(1873)年に帰国して、帝國陸軍に入りましたが、第 3 旅団参謀長として西南戦争に従軍中に戦死しました。また、長州藩最後の藩主・毛利元敏は、明治 4(1871)年 11 月～明治 7(1874)年 6 月の間留学して酪農と気象を学び、帰国後は那須黒磯一帯を「豊浦農場」として開墾し、酪農の普及に努めたほか、長府毛利邸内に私設測候所を設置して、当地の科学教育に尽力しました。

戦後、昭和 27(1952)年 4 月のサンフランシスコ講話条約発効(展示パネルには「締結」と書いてあり、誤り)前後から、下関市と門司市で英国領事館再設置運動が起こりましたが、英国はそれに応ずることはなく、門司にあったホームリンガー商会のトーマス・マルコム氏を関門地区の領事代理(名誉領事)として昭和 27 年 10 月 16 日に任命しました。彼の自宅は、下関の紅葉館(現在の藤原義江記念館)でした。

3 李鴻章道

春帆楼に向かって左手から「李鴻章道」が始まっています(写真下左)。この道は、日清戦争終結のための講和会議のときに、清国全権大使・李鴻章を危難から救うために宿舎との往復に使用したことから、このように呼ばれました。

李鴻章の宿舎は引接寺(いんじょうじ)でした。この道は、進むうちに細くなり、やっと人が一人通れるほどの道幅となります(写真下右)。



民家の番地表示を見て、改めて「阿弥陀寺町」が「あみだじちょう」ではなくて「あみだいじちょう」であったことを思い出しました(写真右)。なぜそう読むようになったのでしょうか。

坂道を登りつめたところに藤原義江記念館がありました。十数年間訪れていませんでしたが、旧英国領事館の写真展示で「紅葉館」と呼ばれていたことを知ったことでもあり、懐かしくなって伺いました。



4 藤原義江記念館(紅葉館)

インターフォンで管理人の女性を呼び出し、お隣のお宅からドアを開けに来ていただきました。下関西高同期生の声学家・内田陽一郎君が生誕百年記念音楽祭に出演したと聞いていたのでお尋ねしますと、そのとおりだとのことでした。

「内田先生は、以前はこのピアノ(1階フロアにあります)を弾きながら、月に1回、生徒さんにレッスンをしておられましたよ」とのことでした。

義江は明治31(1898)年12月5日に、スコットランド人ネール・プロディ・リード(リンガー商会の最高幹部)と稲荷町の美人琵琶芸者坂田キクとの間に生まれましたが、父親に認知されず、不幸な少年期を過ごしました。写真右が記念館です。



5 引接寺(いんじょうじ)

藤原義江記念館を出て、目の前の石の階段を降り切ると、すぐ右手に引接寺がありました。「歴史物語シリーズ 下関豊浦歴史物語」(瀬戸内物産有限会社 出版部 平成11年10月30日3版。以下「参考文献」という)で、引接寺の存在自体は知っていましたが、場所は知りませんでした。

引接寺は浄土宗の寺院で、永禄3(1560)年、亀山八幡宮の麓に小さな寺として建立されましたが、慶長3(1598)年、小早川隆景の菩提を弔うために、藤堂高虎が現在の広い地域に移しました。赤間関の有力町人や長府藩の庇護を受け、萩藩により朝鮮通信使の客館としても整備されました。

昭和20(1945)年6月29日の空襲で寺は焼けましたが、三門(山門)(写真下左右)だけは焼け残り、昭和58年5月に「下関指定有形文化財(建造物)」に指定されました。



この三門は、明和6(1769)年に長府藩9代藩主の毛利匡満が再建しましたが、花崗岩四半敷の基壇は慶長年間に建立されたものと見られ、三門もその当時の様式を伝えているのではないかとされています。

この三門の天井には、左甚五郎作と伝えられる龍の彫刻があります。参考資料によりますと、次のような伝説が残っているそうです。「江戸時代の或る年のこと、夜中に引接寺の石段下で旅人が何者かに殺害され、それから何度となく同じ場所で人が殺された。殺された人の懐にはおカネが残っていたので物盗りの仕業でなく、鬼か大蛇の仕業だと思われた。或る日、船宿に泊まっていた浪人がこれを聞きつけ、怪物退治に出掛けた。やがて生ぬるい風が吹いてきて、暗闇の中から真っ黒な怪

物が襲ってきたので、その怪物を斬りつけた。怪物はものすごいめき声を上げて逃げた。あくる朝早く、浪人がこの寺に来てみると、血のしたたりが参道の石段をのぼっており、それをたどっていくと三門で途切れていた。天井を見上げたら、龍の彫刻(写真下左)の胴体が真っ二つに斬られており(写真下右の赤矢印)、犯人はこの龍であったことが判明した。この龍は、昔から、のどがかわくと水を飲みに階段を降りていたともいわれていた。空襲で焼けなかったのは、この水神のお蔭だったと信じられています。



参考文献によりますと、引接寺にまつわる話がもう一つあります。「享保年間(1716~1735年)、この寺に浄念という気品の高い僧がいた。赤間町のよろず小間物問屋「京屋」の一人娘で美人のお杉が、4月8日の釈迦祭のときに一目ぼれし、お杉は食事も喉を通らなくなり、長い恋文を送ったが、浄念は仏に仕える身だからと突き返した。今度お杉は、男装し刀を腰に差し、塀を乗り越えて浄念の寝所に忍び込んだ。浄念は驚いたが、一緒になれないのならこの場で死にますと短刀を自分の喉元に突きつけたために、とうとう浄念と一緒にすることを約束した。しかし、これが評判になると、道ならぬ恋はけしからんということで、町奉行の差し金でお杉は島流し、浄念は筋ヶ浜で処刑された。この物語が盆踊りの口説きとなり、「引接寺お杉」として全国でもてはやされた。お杉は実在の人物で、六連島(長府藩の流刑地)で70歳まで生きたという。

境内には、小早川隆景の養子となった小早川秀秋が亡き養父の供養のために建立した宝篋印塔(ほうきょういんとう)(右写真の右側)があります。



6 与次兵衛碑

この碑が、参考文献に「下関阿弥陀寺町の第四港湾建設局の裏庭にある」と書かれていましたが、それがどこにあるのかわかりませんでした。今回、Sさんに伺い、そこが唐戸市場の東隣の公園だということが分かりました。第四港湾建設局は、昭和54(1979)年10月に下関地方合同庁舎が竹崎町4-6-1に建設されて移転し、その跡が公園になっています。それにしても参考文献は平成8(1996)年8月8日初版なのに、再調査せずに17年も遅れた情報を記述したことになります。

文禄元(1592)年7月、秀吉が名護屋城(佐賀県唐津市)で朝鮮出兵の指揮を執っていたとき、母親の大政所(おおまんどころ)が危篤だという知らせが来て、秀吉は直ちに大阪に向かいました。

たまたま毛利秀元が報告のために秀吉を訪れていたときのことでした(秀元は、人質として大阪城で暮らしていたときに、才知力量を見抜かれて「秀吉」の「秀」を与えられています)。途中、小倉から御座船「日本丸」に乗った秀吉を護るため、秀元は別の船で先導しました。しかし、運悪く海は大しけで、日本丸は関門海峡の「死の瀬」と呼ばれていた暗礁に乗り上げて浸水し、数名の部下とともに逃れた秀吉は、禪(ふんどし)一つで顔面蒼白となって岩礁の上で震えていました。それを見た秀元は、家来二人を連れて小舟に乗り、秀吉の救出に向かいました。そして岩礁に跳び移る前に二人の家来は刀を海に投げ捨て、秀元は跳び移るやいなや、片膝をついて自分の刀を差し出しました。もし、その気があれば簡単に秀吉を討ち取ることができたのに、そのような行動を取った秀元は、秀吉に激賞されました。

毛利秀元と二人の家来は恩賞に預かったのですが、日本丸の船頭・明石与次兵衛は、大里(門司)の浜で斬首されたとか、死の瀬で切腹したとかいわれています。死の瀬は当時、満潮のときは完全に姿を没し、干潮のときにわずかに岩がのぞく、恐ろしい岩礁でした。一説によれば、明石与次兵衛は秀吉に恨みがあったために、故意に座礁させたといえます。

寛文 10(1670)年、地元彦島の人々が浄財を募って死の瀬に石塔を建て、与兵衛の霊を弔うとともに、安全標識として利用しましたので、「与次兵衛瀬」とか「与次兵衛碑」と呼ばれました。文政 9(1826)年シーボルトの江戸参府紀行文の中にも、与次兵衛碑のスケッチと記述があるそうです。



明治 45(1912)年に開始された関門航路の浚渫工事によって、この岩礁は爆破されました。そして、下関の当地(写真右)と門司のめかりに、この石碑が復元建立されました。ただし、今でもこの遭難場所には浮燈台が設置され、航行する船に注意を促していると、参考文献に書かれています。

7 唐戸市場南側の石碑と像

唐戸市場南側の西隅に、山本譲二作詩・作曲の「関門海峡」歌碑(写真下左)がありました。平成 13(2001)年 4 月に AFC 建立となっていました。AFC とはなんですかね。

また、南側の東隅に、「ふくのフクロ競り」の群像(写真下右)がありました。こちらは、平成 16(2004)年 4 月 25 日 下関市長江島 潔となっていましたので、市立のものと思われます。気を付けて歩けば、意外と新しい発見があるものです。海側にはウッド・デッキが設けられており、市民や観光客がくつろげる、いいスペースとなっています。



7月26日(土)夜には唐戸のイルミネーション・イベントが行われていました。いつもながら、人の少なさが気になりましたが、実に美しく、幻想的でした。たしか、翌日で終わりだったと思います。



おわりに

今度帰関するときに新しい発見があるかどうか分かりませんが、またどこかを散策してみたいと思います。

(おわり)

(その6)本行寺・藤原義江・光明寺・高杉晋作(2014年10月23日)

はじめに

10月12日(日)に日新中同期生会(みな同会)総会・懇親会参加、13日(月)に下関西高同期生の金曜会への特別参加、15日(水)に大分市での仕事のため、11日(土)午後から14日(火)午後の間、下関に帰りました。

このシリーズに登場していただいているSさんから、また新しい情報を入手しました。「関門海峡歴史文化検定」というのがあって、学士、修士、博士の称号が与えられるのです。ネットで検索したら、問題・解答集のPDF(以下「参考文献1」という)が出てきましたので、プリントアウトしました。かなり難解な問題が多いですが、500の問題と解答を丸暗記しておけばいいのですから、あまり苦にはならないようです(我々老人には無理か?)。運営しているのは、下関商工会議所内の「関門海峡歴史文化検定実行委員会」です。ただ、受験料が学士3,000円、修士4,000円、博士5,000円と高いですから、これは下関の観光事業発展のための寄付であると考えたほうがよさそうです。

1 「元治三年」などという呼び方の特異性

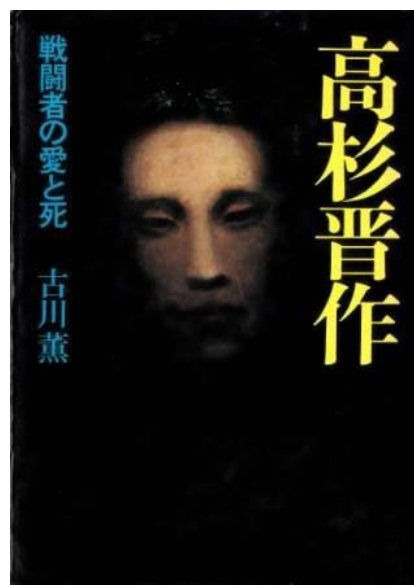
このシリーズの2回目で、本行寺にある奇兵隊の墓(写真右)の墓碑のうち二つの没年が間違っていると書きました。つまり、「本谷人と重富秀之進の没年が、元治(げんじ)三年となっているが、元治は二年まで(この年が慶應元年)なので誤りだ」と書いたのです。



しかし、参考文献1に「慶應」は徳川慶喜の「慶」に通ずるのでこれを嫌い、長州はわざと「元治三年」や「元治四年」と書いたと述べられています。お詫びとともに訂正します。

因みに、参考文献1には、「元治三年表記は太平町の了圓寺、赤間町の本行寺、吉田の東行庵、北九州市小倉北区の赤坂墓地にあり、元治四年表記は美東町大田金麗社の奇兵隊燈籠にある」と書かれています。「太平町」(たいへいちょう)は「大平町」の誤りです。

20年以上前に古本屋で買った「高杉晋作 戦闘者の愛と死」(古川 薫著、写真右、以下「参考文献2」という)を改めて読んでみたら、多くの貴重な事実が記されていました。表紙の絵は、誰が描いたのか忘れましたが、晋作を描いた唯一の油絵です。



参考文献2には、教法寺事件のきっかけが、事件当日の世子定広の砲台巡覧にあったことが記されています。すなわち、奇兵隊が守る前田砲台を視察し、その後先峰隊(武士の部隊)が守る壇ノ浦砲台を視察する予定が、元々関心のあった奇兵隊の先進的な訓練を見ているうちに日が暮れて壇ノ浦の視察が延期となり、事実上中止してしまったことで、先峰隊士が「自分たちの存在が無視された」と怒り、使番(つかいばん)の宮城彦輔(みやぎひこすけ)に「お前の責任だ。貴様の宿舎を襲うから覚悟しておけ」と脅したため、彦輔が晋作のところに泣きついてきました。晋作はそのとき、赤根武人と暮を打っていましたが、

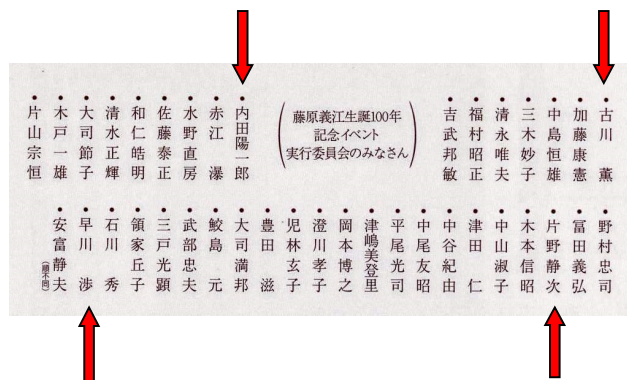
大負けして頭に来ていたこともあり、怒った晋作が一人で先峰隊の宿舎**教法寺**に行き、「責任者は出てこい！」と怒鳴ったとき、先峰隊の誰かが小銃を1発天井に向けて撃ったために、晋作の後を追って駆けつけた奇兵隊士約50人が突入し、逃げ遅れた5人のうち、病気で寝ていた259石取りの**蔵田幾之進**が殺害されました。宮城彦輔は責任を取らされた形で教法寺において切腹し、晋作が介錯しましたが、事件の責任が晋作にあったことは明らかでした。その後晋作は蔵田幾之進の息子**蔵田千弥**に命をつけ狙われました。

ところが、「**維新閑話**」(富成 博著。以下「参考文献 6」という)によりますと、少し事情が異なります。まず先峰隊は**選鋒隊**となっており、世子定広の砲台巡閲が中止になったのは、「**風雨のため**」となっています。また、先に選鋒隊士が宮城彦輔の留守に宿舎に押しかけ、狼藉を働いたとあります。

2 再び藤原義江記念館(紅葉館)のこと

先日、書斎の本棚を整理していましたが、「藤原義江記念館友の会会報」1998年1月号(表紙は写真下左)が出てきました。私が最初に同館を訪問したのは、16年前だったということになります。この年は明治31(1898)年に生まれた**義江の生誕百年**に当たり、記念祭が行われることが書かれており、2頁(写真下右)には実行委員として**古川 薫先生**、西高同期の**内田陽一郎君**、**片野清次君**、日新・西高同期の**早川 涉君**の名が載っていました。当時まったく読んでおらず反省しています。

古川 薫先生は、御承知のように藤原義江の生涯を描いた「**漂白者のアリア**」(以下「参考文献 4」という)で直木賞を受賞されています。最近、アマゾンでこの文庫本(次頁右上写真)を求めて読みました。前号で義江の誕生日を12月5日と書きましたが、この本によると、国東半島の杵築にあった「**旭楼**」の主人・**藤原徳三郎**が義江に同情して戸籍を作ってくれたために、やっと人並みになれたのですが、その日付は徳三郎が口から出まかせに申告した日でした。母のキクは役場から帰って7月30日だったと思い出しましたが、それも誤りで、あとで出てきた臍の緒に書かれていた日付の8月21日が最も正確らしいものでした。しかし、それもすでに手遅れとなりました。



義江は幼少期、小学校にも行かせてもらえずに様々な業種の店などに丁稚奉公に出され、奉公先では腐った飯を食べさせられたこともあって、極めて悲惨な生活を送りました⁴⁾。

義江の父リード(生前は西南部の瓜生商会総支配人)の墓が**下関市営東部墓地**にあることが分かりましたので、**養治小学校**の北西部にある同墓地を訪れました。墓地の中を歩きましたが、見当たりませんでしたので、入口階段の傍にある**天台寺門宗「平等院」**のチャイムを押しました。

出てこられたのは住職のHさんで、直ちに「御案内します」と言われ従いました。御影石でできた十字架のお墓でした。

伺いますと、Hさんは日新・西高の2年後輩で、Sさんのことをよく御存知でした。飲み仲間だそうです。某電機会社OBのHさんは九大大学院の非常勤講師を務めておられ、よく諸外国を訪問されて海外の技術者との交流を深められているそうです。

Hさんは下関西高の1年生時代に柔道部員だったそうで、西高の主将が留守のときに、幡生工業高校の西森君(魁傑)が道場破りに来たそうです。副主将が相手をしたのですが、西森君は副主将を投げたものの襟を掴んだまま床に付けず、また引き起こして投げたそうです。当時の幡生工業柔道部の主将・大平孝雄君に聞きましたら、他の部員も含め、まったく知らなかったそうです。魁傑は今、あの世で苦笑いをしていることでしょうか。実に貴重な秘話です。

英国人ネイル・プロディー・リードは1870年にスコットランドで生まれ、大正9(1920)年1月16日に49歳で亡くなりました。義江がこの墓に参ったのは、瓜生商会の番頭さんのとりなしでやっと父に実子として認知され、父の資金援助のもと、欧州へ音楽留学の旅に出発するときの大正9年3月と、昭和2(1927)年10月に九州公演旅行の途中に立ち寄ったときの2回だけでした。義江は女とカネにルーズで、大金を一晩で飲食などに使い果たすこともしばしばあり、カネがなくなると瓜生商会に無心しました⁴⁾。

Hさんは義江に会ったことがあるそうで(義江は昭和51年に亡くなっています)、黒のスーツに赤いマフラーをしていて、食事をするときには必ずワインを飲んだそうです。

Hさんはまた、市営墓地の隣の平等院の墓地から、昭和35(1960)年頃、英国艦が撃った丸い砲弾が出てきたという話をされました。その頃は流線形の砲弾になっていますから、丸いのは珍しいです。英国製との刻印が施されていたそうで、貰いたいと市に申し入れたそうですが、火薬入りであるために呉れなかったそうです。Hさんは英国に押収された下関砲台の大砲の返還運動をしておられます。

紅石山(べにしやま)の中腹にある元の紅葉館は明治末に建てられ、白ペンキで塗られた洋風木造建築でした⁴⁾。

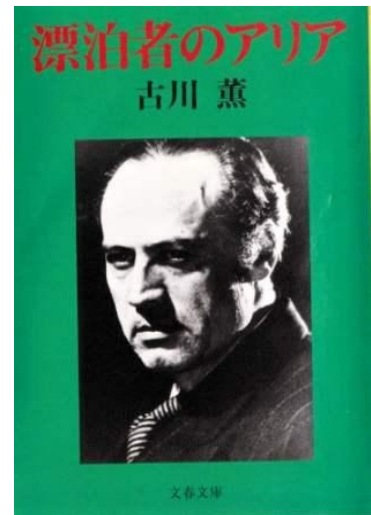
先に述べた「維新閑話」はHさんにお借りした本です。

3 「赤岸」の地名の謎が解けた

ネットに「路地を歩く - 赤岸通り」という記事があり、森川米穀店の写真も出ています。石碑の写真がありましたので、実家からそれを探しに行きましたら、貴船町3丁目の山口県児童相談所の近くにありました(写真右)。

ところが、この石碑の文章が杜撰で、「昔この辺まで海が入り込んでいた赤岸というのは紅石山の同じ質の赤い色をした岩だったとこから地名が付けられた」と書かれています。平成2(1990)年3月に市が建てたものですが、市の役人の検査がいい加減だったのでしょうか。最初の下線は「と」でしょうし、最後の下線は「ろ」が抜けているようです。

子供のころから、「なぜ赤岸というのだろう?」という疑問を持っていましたが、これで「赤岸」の地名の謎が解けました。



4 光明寺

最近、「剣と法典 小ナポレオン 山田顕義」（写真右、以下「参考文献 5」という）を読みました。流山市の某総合病院の待合室にあった本で、著者名の古川 薫に惹かれて、手にしました。アマゾンで注文したら、非常にきれいなハードカバーの本(帯なし)が、わずか1円でした。

病院の本の帯には「生粋の軍人でありながら司法大臣として司法に心血を注いだ軍人政治家、日本大学の創立者山田顕義の激動の生涯を描く書下し長編歴史小説」と書かれていました。

山田市之允(いちのじょう。のちの顕義(あきよし))は、安政4(1857)年9月、14歳で松下村塾に入りました。当時、久坂玄瑞は18歳、伊藤利助(のちの博文)は17歳で、よく市之允の面倒を見ました。翌安政5年には6歳上の山縣小輔(やまがた・こすけ)も入塾しました。山縣は、小助、小輔、狂介、有朋と名を変えました。参考文献5によると、顕義の戦術能力の高さを妬んで冷たく接したため、顕義は嫌になって軍人を辞め、法律家になりました(当時中将)。しかし、彼の戦術能力はいつまでも高く評価され、明治時代の内戦ではよく呼び出されて指揮官として政府軍を勝利に導きました。

この本の中に光明寺が出てくるのです。文久3(1863)年4月10日、尊王攘夷派の突き上げで、幕府は止むを得ず5月10日を攘夷期日とすることを、しぶしぶ奏上しましたが、それは「彼より襲来せば、之を掃攘すべし」と正当防衛の原則を述べただけのものでした。しかし長州は、5月10日を攘夷期日だと勝手に解釈しました。

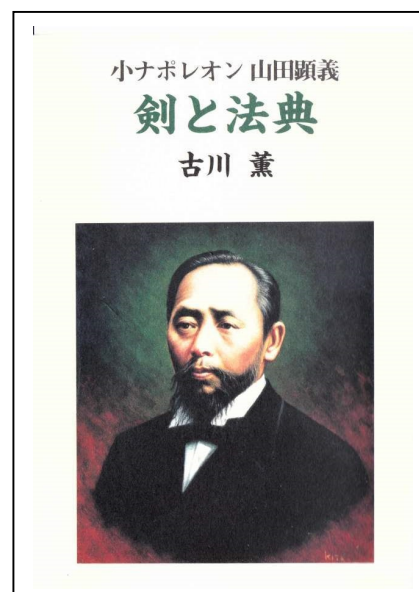
この日、京都にいた久坂玄瑞は世子の毛利定弘に願い出て「馬関に行き、攘夷の先鋒を務めたい」と願い出て許され、市之允ら30人を率いて、細江町の光明寺(写真右)を宿舎としました⁵⁾。

実際にはその前に竹崎の長泉寺に屯営を許され、その後光明寺に本営を移しています⁶⁾。勢力はやがて50~60人になり、首領には京都から脱走してきた持従中山忠光を迎えました⁶⁾。

そして彼らは「光明寺党」と呼ばれました。因みに、松下村塾出身の活動家は「松下村塾党」と呼ばれました。光明寺の門前には、どこから手に入れたのか分かりませんが、船首に飾りとして取り付けられていた異人を象った大きな人形が置かれており、玄瑞らは通るたびに「この野郎！」と言って蹴飛ばしていたそうです。

光明寺党は、5月11日未明に亀山砲台から米国船を攻撃したのを皮切りに、5月13日早朝に仏軍艦、5月26日早朝に蘭軍艦を攻撃したまではよかったのですが、6月1日以降報復攻撃を受け、元治元(1864)年8月6日の四ヶ国連合艦隊の総攻撃を受けるに至ります。光明寺の3本の柱には、玄瑞らが斬りつけたと見られる刀傷が残されているといえます。

文久3(1863)年6月6日から高杉晋作が奇兵隊の編成に取りかかりますが、この際、光明寺党の浪士も数人参加しています²⁾。



5 桜山神社しょうこんしゃ(招魂社)

これからは、下関駅の観光案内所で貰った観光ガイドマップから引用した要図(図右)を参考にしながら記述します。

前項の「光明寺」はに当たります。豊前田町から細江町にかけて続く道路は「晋作通り」と呼ぶそうですが、猪口を持った、かなり駄作の像(写真右下)が石碑の上に鎮座していました。

桜山神社に関し参考文献1には、こう書かれています。

『高杉晋作は、戦死した同志の霊を慰め、また後に残る者も、死を常に覚悟して時局に臨むため、生墳を築く必要があるとして、共同の招魂の場を設けることを提唱します。場所も新地町の背後にある小丘の「岡の原」に決定、慶応元(1865)年7月に上棟式が行われ、8月には招魂社落成の祭典が行われました。招魂場には先覚の師・吉田松陰の霊を祀り、慶応2(1866)年の小倉戦争の戦死者を祀り、周囲には桜の木を植え、人々はこの岡の原を桜山といいならわすようになりまし。桜山神社の招魂場では身分の区別なく、同じ規格の霊標 391 柱が整然と並んでいます』

ネット記事によりますと、「掲示板説明」として次のように書かれています。つまり、招魂場(じょう)は、元治元(1864)年1月、晋作の発議によって創設され、慶應元(1865)年8月に落成しました。創建当初は文久3(1863)年5月11日に始まる馬関攘夷戦において戦死した奇兵隊士の霊を弔うものでしたが、四境戦争や戊辰戦争における戦死者、ならびに尊王倒幕運動に功績のあった吉田松陰、高杉晋作、久坂玄瑞及び山形有朋らの霊も祀られました(写真右)。

上記参考文献1では「391柱」となっていますが、ネットでは「396柱」となっていますので、拝殿前に準備されている「奉祀者氏名表」で一人ずつ数えましたら、「391柱」でした。ネットのほかのサイト



を見ましたら、「神霊は現在 391 柱(神霊碑は 396 柱)」となっていて、納得しました。

慶應 2(1866)年 8 月 6 日の落成祭典には、奇兵隊士とともに高杉晋作も参列しました。吉田松陰の霊標が一つだけ高く、向かって右に高杉晋作、左に久坂玄瑞が祀られています(写真右)。まさにこの 3 人が今の日本国を作る原動力となりました。



晋作は、同年 7 月 26 日の小倉城下赤坂攻撃の軍議前に体調不良を隠せず、白石正一郎に頼んで医師の診断を受けて静養を命ぜられたため正一郎宅に病室を構えて入り、その中で軍議を行いました。しかし、7 月 27 日には赤坂攻撃の指揮官として行動し、夜営もしています。ただし、赤坂砲台を占領した 7 月 28 日に病状がまた悪化し、正一郎宅で寝たまま軍議を行いました²⁾。

6 高杉晋作療養の地

8 月 1 日に咯血し、同日に小倉城が陥落したことを確認すると、晋作はもはや起き上がれない状態になりました。10 月 20 日に馬関口海陸軍参謀の職を免ぜられた晋作は、すでに自らの病名を労咳だと認識しており、他人に病を移さないための配慮か、「僕の病室を桜山に移してくれませんか」と言って桜山の麓にある元奇兵隊屯所の農家を改造した粗末な家に移り住みました²⁾。



前頁ガイドマップの「桜山公園」が見当たらず、近所の年配の女性に尋ねましたら、公園はすでになくなって民家になっているとのことでした。その写真が右で、「高杉東行療養の地」という石碑が立っています。ここにあった建物は「東行庵」(とうぎょうあん)とも「捫蝨処」(もんしつしょ)とも呼ばれました²⁾。

7 了圓寺(りょうえんじ)

元治元(1864)年 12 月 15 日、晋作は俗論派打倒の兵を長府功山寺に挙げましたが、脱落者が出て、遊撃隊・力士隊の約 80 名しか集まりませんでした。功山寺を選んだのは、三条実美に挨拶をするためでした。ここが晋作の偉いところで、公家を擁立する形を取ったことで、「単なる私兵ではない」ということを示したのです。



晋作指揮の遊撃隊・力士隊が補給品を確保するため、新地の萩藩会所(前頁図の)を襲ったのは 12 月 16 日午前 4 時でした。襲撃は成功しましたが、その後の防御態勢確立のために高台の了圓寺(前頁図の 写真右)に立てこもりました。

新地会所襲撃が成功すると 120 名が集まったので、晋作は伊藤俊輔を総督とする好義隊を結成しますと、ためらっていた奇兵隊始め諸隊が参加し、叛乱軍は 2 千を越えました。光明寺同様、寺の柱には浪士たちの刀傷が残されているそうです。

8 萩藩新地会所(かいじょ)跡

図 位置、**巖島神社**の階段登り口のすぐ左に石碑と掲示板がありました。「新地」の名称は、入り海であったところを、宝暦 12(1762)年から明和 5(1768)年まで 6 年をかけて埋め立てたところから付けられました。ただ、掲示板(写真右下)が、ネットの写真では「会所」となっていますが、「御用所」(ごようじょ)に書き換えられています。作成者名もネットの「維新の史跡を守る会」から「歴史真理探求事務局長 前田周作」となっていますので、何らかの事情で見解が変更されたようです。



9 巖島神社

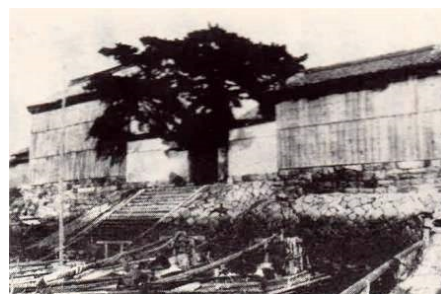
平家一門が安芸の巖島神社の分霊を船中に祀っていたものが、寿永 4(1185)年の**壇之浦の合戦**後に磯辺に流れ着いたため、社殿を建立して祀ったのが始まりです。境内にある太鼓(写真右)は、慶應 2(1866)年の小倉戦争の戦利品として奇兵隊が小倉城から持ち帰ったものだそうです。



10 白石正一郎旧宅跡(奇兵隊結成の地)

現在中国電力の建物があるこの地(写真右)が**白石正一郎宅跡**で、文久 3(1863)年 6 月 8 日、この邸宅内で奇兵隊が結成されました。白石正一郎は「小倉屋」という問屋を営んでおり、現在国道 191 号線となっているところが船着き場でした。写真右下が当時の状況です³⁾。

正一郎は長府藩の支藩である清末藩の御用商人で、他の御用商人に比して不利な立場にあり、萩本藩の御用商人に自ら開拓した仕事を奪われるなど苦勞をしました。また、自分も奇兵隊に入隊し、奇兵隊や諸隊に資金援助をしました。しかし、隊士に飲み食いされ、また、萩本藩の御用商人に嫌がらせをされた末に倒産し、明治に入っても名を成すことはありませんでしたが、阿弥陀寺が赤間神宮となったのを機に初代神官となり、その 5 年後に 69 歳で亡くなりました²⁾。



奇兵隊への応募者は五、六十人に及び、家が狭くなったので、本営は阿弥陀寺に移りました。300人に達してもなお応募者があったので、**鷹懲隊**、**八幡隊**、**遊撃隊**などの民兵組織を作り収容しました。これらは大小合わせて200を越え、「諸隊」と呼ばれましたが、どの部隊についても「奇兵隊」と呼ばれた時期がありました²⁾。

11 高杉晋作終焉の地

5頁図の位置になります。慶應3(1867)年2月初旬、晋作の病状が悪化しましたが、その頃は新地の酒造家、**林算九郎**の離れ座敷(写真右の場所)で療養していました。晋作としては、あまり白石家に迷惑をかけたくないと思っただけの転居だったのでしょう。

病状の悪化を聞き、正妻の**雅子**が萩から長男**梅之進**を連れて二度目の見舞いに来ました。おうのはその間、桜山下の妾宅でじっとしており、雅子の前には現れませんでした³⁾。

ただ**野村望東尼**(もとに)という62歳の尼は、親子ほどの年齢差もあっての故か、雅子の前に姿を見せていました。この尼は超美人で、身に危険が及んだときにいつも他国に逃げていた晋作が元治元(1864)年11月10日から10日間、福岡城南の平尾山荘でかくまってくれた人です。その後彼女は福岡藩の実権を握った保守派によって晋作をかくまった罪により糸島半島の沖の姫島の牢に入れられました。晋作は病床から若者に指示を与えて慶應2(1866)年9月16日に脱出を成功させ、彼女は白石正一郎宅にかくまわれたのち、その日のうちに西之端の豪商・**入江和作**の家に移りました。



参考文献6によりますと、著者**富成 博**先生の祖母は白石正一郎の従妹の**白石ヤナ**さんで、当時17歳でした。ヤナさんも晋作の看病に当たりましたが、晋作が見舞いに来た奇兵隊士たちに「しっかりやってくれろ」と口癖のように言っていたのを聞いていたそうです。晋作は慶應3(1867)年4月14日午前2時に亡くなりました。その後の9月28日には、京都に出陣する**揖取素彦**と**山田顕義**が防府で過ごしていた望東尼に挨拶をしています。

藤原義江は酒、女、金銭にルーズでしたが、**高杉晋作**も同様でした。立場が危くなると藩の命令で何度か異動を命じられ、晋作は最初で最後の上海への海外留学をさせてもらいました。文久2(1862)年1月3日、諸藩代表者を乗せた船が江戸を出港しましたが、長崎を出港したのは4月末でした。藩から出たのは24両だけで、実家などから旅費を貰い500両を持っていましたが、長崎から上海に向けて出港したときは、すでに大半を飲み食いに使ってしまっていました²⁾。

改革派が俗論派を破って藩論が討幕に固まったところで欧州留学を申請し(俗論派の仕返しを危惧した面もあったと思います)、藩主もおおらかなもので慶應元(1865)年3月26日、上海行きという名目でそれを許可し、**佐世八十郎**(前原一誠)と**井上聞多**が千両の旅費を工面してきました。これを貰って長崎まで行ったところで、「このような時期に国を逃げ出すとは何ごとだ!」とグラバーとラウダ領事に諭され(彼らのほうが萩の藩主よりもまとめます)、晋作も晋作であっさり諦め、千両をすべて飲食に使いつつ使っています²⁾。1両は今の5万円ですから、5千万円も飲んだことになります。

しかし、高杉晋作がいなかったら、今の「この国のかたち」はなかったし、彦島は英国の植民地として、冗談ではなく、今も「ヒコットランド」と呼ばれていたかもしれません。

亡くなる前2週間前後、「吉田…吉田…」とよくうわごとを言ったために、それが吉田松陰のことなのか、吉田の奇兵隊本陣のことが分かりませんでしたのが、墓は下関市の吉田に建立されました。

おわりに

今度帰関するときにも新しい発見があるような気がしてきました。またどこかを散策してみたいと思います。

(おわり)

<参考文献>

- 1) 「関門海峡歴史文化検定 問題・解答集」(インターネットPDF 下関商工会議所 関門海峡歴史文化検定委員会編)
- 2) 「高杉晋作 戦闘者の愛と死」(古川 薫著 新人物往来社 昭和48年6月25日1刷)
- 3) 「長州の革命児 高杉晋作」(別冊歴史読本10 新人物往来社 平成元年10月18日)
- 4) 「漂白者のアリア」(古川 薫著 文春新書 平成5年5月8日1刷)
- 5) 「剣と法典 小ナポレオン 山田顕義」(古川 薫著 (株)文藝春秋 平成6年11月30日1刷)
- 6) 「維新閑話」(富成 博著 長周新聞社 昭和51年6月15日)

(その7) 唐戸・長府(2015年5月24日)

はじめに

4月25日(土)~29(水)の間、一人暮らしの母の顔を見るために下関に帰りました。今回は、**唐戸**、**長府**及び**吉田の東行庵**に行きました。皆さん御承知のことばかりであろうと思いますので、今回は最近下関を訪れていない皆さんを主対象に**唐戸**と**長府**のレポートをお送りします。

25日(土)は、バード・ストライクによる点検の影響で羽田出発が35分遅れ11:25頃に北九州空港に着きました。しかし、同空港発のリムジン・バスで倉田君と一緒にになってしまいました。二ヵ月前からある方と会食の約束をしていたので宴会がかち合い、**長岡君**と倉田君に見つからないように注意していたのですが、思わぬところでバテてしまいました。下関駅で岩国方面の列車に乗る倉田君と別れ、バス停に向かいました。下関駅前ロータリーの舗装が完了していましたが、何か殺風景なものを感じました。これから華やかな風景になるように願っています。



1 唐戸周辺

下関でも放映されているかと思いますが、ケーブルテレビで「青汁」のコマーシャルに登場している**道中宏司**(みちなかひろし)さんを知り、氏の像を改めて見に行きました(写真下左右、右端が氏)。現役最年長のふく仲買人(株**道中**経営の77歳)で、唐戸市場を有名にした功労者だそうです。奥さんが亡くなれば、野菜不足の食生活を改善するために青汁を飲んでおられるそうです。



幕末維新館(写真右)は閉鎖されていました。テーマ館経営はいろいろたいへんなのでしょう。以前、二度ほど訪問しましたが、展示品(レプリカのみ)が少ないのでインパクトに欠けました。



旧英国領事館では「第 14 回 帆船模型展示会」が開かれていました(写真下左右)。写真下右は「長州藩 川御座船」で、18 世紀に建造されたものの模型です。



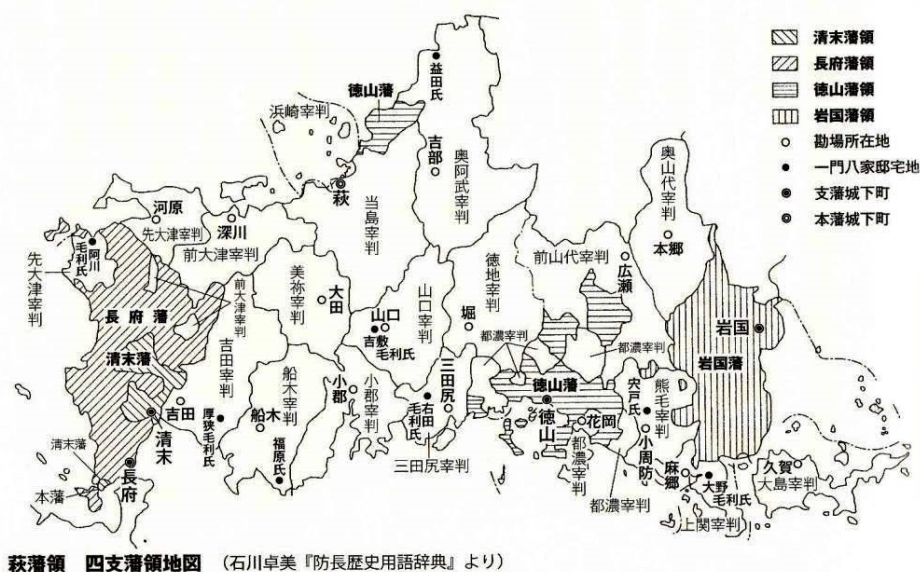
2 「長府」の地名の由来と長府藩

「長府」の地名は、「長門国府」に因みます。「府中」と呼ばれた時期もありました。

長府藩の歴史は、天正 20(1592)年 4 月 11 日まで遡ります。毛利元就(もとなり)四男の穂井田元清の子で毛利輝元(てるもと)の養子となった毛利秀元(ひでもと)が藩祖です。秀吉は紛争を避けるため輝元に「実子が生まれたら分家をする事」を命じました。

そこに嫡男秀就(ひでなり)が生まれたために、慶長 3(1598)年 8 月 1 日、豊臣政権は秀就を毛利家の後継者として認め、秀元には輝元から領地を分知されて大名となることが決定され、翌年 6 月、秀元に長門国一国と安芸国佐伯郡及び周防国吉敷郡の 17 万石が与えられて、父の小早川隆景の例に倣って、毛利家の家臣でありながら大名としての身分が与えられました。これが、長府藩の立藩です。

関ヶ原の戦い後、毛利家が 8 カ国 120 万石から 2 カ国 36 万石に減封された際、輝元は、東の守りとして岩国に吉川広家(きっかわ・ひろいえ)、西の守りとして長門国豊浦郡(下関市)に秀元を配置しました。長府藩は最終的に 5 万石になりました。また、綱元(つなもと)のとき、叔父の毛利元知(もととも)に 1 万石を分知し、支藩の「清末藩」を立藩させています。萩藩から見れば、「孫藩」になります。萩藩と四支藩の状況は下図のとおりです。



萩藩領 四支藩領地図²⁾

3 長府案内図

かなり以前に貰ったパンフレットの図(図右)を頼りに歩きました。

取り敢えず「金屋浜(かなやはま)バス停」で降り、川沿いに進みました。



4 乃木神社

下関の乃木神社(写真下左右)は大正9(1920)年に建立されたそうです。また、東京にある同神社は大正12(1923)年に建立されたそうです。写真下右は「二〇三高地の松と碑」です。



5 長門国国分寺跡

天平13(741)年に聖武天皇が諸国に国分寺及び国分尼寺を建立しましたが、長門国分寺がこの地に建立されました(写真右)。

その後南部町に移されたそうですが、こちらに帰ってからそのことが分かり、確認できず残念です。寺宝として木造不動明王立像と絹本(けんぼん)着色十二天曼荼羅図があるそうです。



6 覚苑寺(かくおんじ)

元禄 11(1698)年、長府毛利藩 3 代目藩主・綱元が宇治黄檗山万福寺 7 世・悦山道宗禅師(中国福建省の人)を招いて創建しました。功山寺、笑山寺とともに長府藩の菩提寺となりました。

幕末期、功山寺に潜居している五卿を守るため、奇兵隊がここに本陣を設置しました。山門(写真下左)と狩野芳崖銅像(写真下右)です。黄檗宗の寺です。



境内には我が国最初の金属貨幣「和同開珎」を鑄造した長門国鑄銭所跡があります(写真下左)。鑄銭遺物は長府博物館に展示されているそうです。堂宇は明の黄檗流の様式を備えています(写真下右)。また、庫裏は明治 6(1873)年に勝山御殿の一部を移設したものだそうです。



乃木希助銅像(写真下左)及び毛利家墓所(写真下右)です。



7 功山寺

嘉暦2(1327)年創建です。当初は臨濟宗で金山長福寺と称し、足利氏、厚東氏、大内氏などから敬われましたが、弘治3(1557)年に大内義長(よしなが)が毛利氏の軍に囲まれてこの地で自刃した際、戦乱により荒廃しました。

その後慶長7(1602)年、長府藩祖毛利秀元(ひでもと)が元の姿に戻すとともに曹洞宗に転宗しました。そしてその後、2代藩主毛利光広(みつひろ)が秀元の霊位を安置して以来毛利家の菩提寺となり、秀元の法号「智門寺殿**功山**玄譽大居士」に因んで「功山寺」と改称しました。

現在の仏殿は元応2(1320)年の建立で、典型的な鎌倉期禅宗様式として国宝に指定されており、10代藩主毛利匡芳(まさよし)のとき、地元の工匠の手により山門(写真下左)が完成しました。これは市指定文化財だそうです。写真下右は「高杉晋作回天義擧像」で、揮毫は岸 信介元首相です。



写真右は「万骨塔」(ばんこつとう)です。「一将功成り萬骨枯ル」という言葉に因み、桂 彌一(かつら やいち)が昭和8(1933)年10月に建立しました。

国のために尽しながら名も知れずに散っていった霊を慰めるため、全国から寄せられた石が祀られています。



8 笑山寺(しょうざんじ)

笑山寺は功山寺の前身です。長府藩祖毛利秀元が祖母の乃美大方(のみのおおかた)の菩提寺として建立し、父の元清(もときよ)も祀りました。「笑山寺」の名称は、元清の法号「洞雲寺**笑山**常快」に因んでいます。場所は今の功山寺のある所です。

今の笑山寺(写真右)の地に、長府亀の甲にあった廃寺「潮音院」(ちょうおんいん)を移して「妙寿寺」(みょうじゅじ)として元清の室を祀りましたが、秀元没後は2代藩主・光広(みつひろ)が秀元を祀るために笑山寺を「功山寺」と改称し、笑山寺を妙寿寺の地に移して妙寿寺を「笑山寺」としました。



「笑山寺十三重石塔」(写真右)は、下関市指定有形文化財だそうです。鎌倉時代後期から南北朝期ころの造作とあります。

潮音院がこの地に移されたときに、一緒に移ってきたとみられています。



9 長府藩武家長屋(旧西家武家長屋)

写真右は、長府藩家老職であった西家の分家(長府藩御馬廻役 220 石)の本門に附属していたもので、以前は 500m ほど南にあったそうです。長屋といいながら、構造の重厚さ、特に仲間部屋格子窓の造りなどは上級藩士の趣を残しており、建築規模や格子窓の形態から江戸後期の建築物と思われるとのこと。

中では老人二人がひそひそ話をしていましたので、外観だけ撮りました。因みに「屋敷」という言葉は、武士以外の建物地域には使用できませんでした。



10 旧野々村家表門

野々村家は藩祖毛利秀元以来、代々長府藩に仕え、禄高 130 石の御馬廻格の家柄でした。幕末期の当主野々村勘九郎は、元は萩野十郎左衛門の次男でしたが、野々村家の養子となり、のちにこの門の形式は、主柱に扁平な角柱、背後に角の控柱を建てた薬医門で、屋根は棧瓦葺、扉は両開き式ではなく、半分が下見壁で引込戸になっています。長府に残されている薬医門や棟門の中では規格も大きく、上級武士の屋敷としての趣が見られると解説されています(写真右)。

昭和 63(1988)年 11 月、南の浜町から移築保存されました。市指定有形文化財だそうです。



11 白石正一郎邸浜門

今回、私が最も行ってみたい場所でした。「長府観光会館」(散策 MAP などは置いてありますが、観光案内をする方はいません)の売店の女性に尋ねましたが知らず、奥に入ってもう 1 名の女性に聞いたところ、「どうやら長府駅の近くにあるようだ」というところまで分かったのですが、会食の時刻が迫ってきたので、翌日に持ち越すことにして、25 日(土)の探索を終えました。

翌 26 日(日)に**長府駅**(写真右)に行ってみました。駅の観光案内図には**城下町長府**の周辺しか書かれていません。きれいな駅舎(初めてこの駅に来ました。3年前に改装が終わったようです)の階段を上って改札口横の売店の御主人に聞いても分からず、切符売り場のかわいい二人の女性駅員に尋ねましたら、二人とも知らなかったものの、1名がタブレット端末で住所を調べてくれました。「長府松小田町 11 - 25」にあるということです。



そこで駅前の交番(写真右)に行きました。交番には警察官 OB の指導員がおられ、「よくぞ聞いてくれた」というふうに、即座に教えてくれました。「駅前の道路を右へ 300m ほど歩くと造園業者の敷地があるから、それを過ぎ、小さな橋を渡って左に折れたら 30m くらいである」ということでした。白石正一郎について説明を始めたので、私が知っている内容を話しますと、「あんだ、よう知っちょるねえ」と感心していただけました。



言われたとおりに歩き、長さ 1m くらいの橋を渡って左に折れ、川沿いに少し歩くと斜め右に折れる道があり、畑を左に見ながらその道を歩くと、すぐ右に「**浜門**」が見えました。

土塀が崩れかけていますが、風格のある門でした(写真下左右)。この門を、正一郎の日記に記された約 400 名の志士がくぐったのです。その中には**坂本龍馬**や**西郷隆盛**もいました。



清末藩領竹崎町の萬(よろず)問屋「**小倉(こくら)屋**」は 17 世紀半ば、豊前小倉藩小笠原氏に仕えていた**白石作兵衛**(しらいし・さくべえ)が侍奉公を辞めて小倉から移住して始めたものです。

白石正一郎は米、反物、煙草、藍玉、酒、塩、木材、石炭、蠟など多くの品目を扱いました。「回船問屋」という表現は、船を持っていませんので当たりません。下関の郷土史家**町田一仁氏**は「荷受問屋」と呼びました。寛永年間に酒造権を手に入れ、これでかなり儲かったようです。ほかに質屋、金融業を営み、山林や抱屋敷もたくさん持っていました。6 代目平三郎は庄屋だったし、8 代目正一郎も文久 3(1863)年に奇兵隊御用を命じられるまで、竹崎町大年寄を務めました。

しかし、清末藩自体が宗家の萩藩や本家の長府藩に頭が上がりず、白石家が発展しようとするほど、萩や長府の役人や商人がグルになって陰湿ないじめを企みました。特に、梅田雲浜が計画した薩長連合の一環としての薩摩との貿易に関わり、この連合に貢献しようと考えた正一郎でしたが、萩藩や薩摩藩の武士や商人などのいじめに遭い、数千両の赤字を出して、萩藩から千五百両の貸付を受ける代わりに竹崎の白石邸を萩藩の本陣として差し出しました。

私が以前、「奇兵隊や諸隊の連中が飲み食いしたお蔭で倒産した」と書きましたが、そうではなくて深刻な事態に追い込まれてのことだったことが、参考文献 1 で分かりました。

おわりに

長府の皆さんは老若男女が非常によく挨拶され、清々しい気持ちになりました。特に男子中高校生の挨拶には感心しました。長府の教育はすごいです。次回は「東行庵」をお送りします。

(おわり)

<参考文献>

- 1) 「誰も知らない 幕末薩長連合の真相」(富成 博著 (株)新人物往来社 2010年9月11日)
- 2) 「その後の長州五傑」(松野浩二著 東洋図書出版(株) 平成 23年9月1日初版)

(その8)東行庵(2015年5月31日)

はじめに

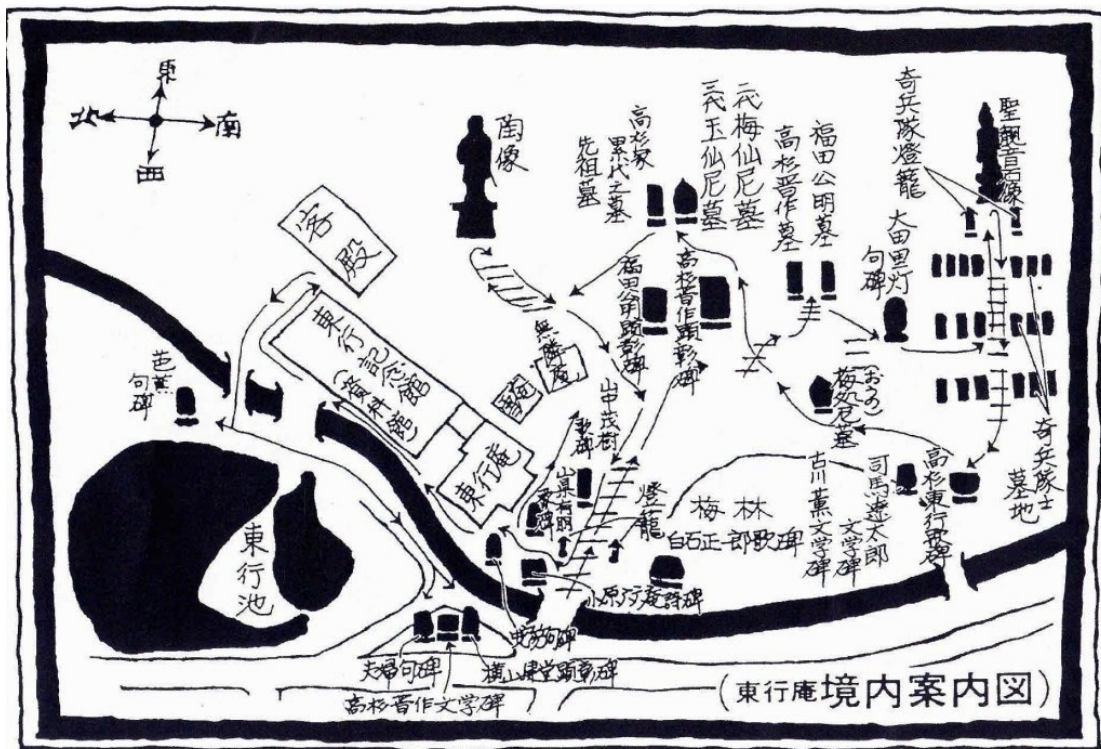
今回は4月28日(火)に訪れた東行庵の状況をお送りします。約10年前に一度訪れたのですが、今ほど関心を寄せていませんでしたので印象は薄くなっていました。晋作が慶應3(1867)年4月14日に新地で亡くなる間に「吉田」と言ったことから、この地に東行庵が建てられました。晋作は「吉田松陰先生」と言おうとしたのかもしれませんが、今となっては謎のままです。

1 東行庵及びその周辺見取り図

唐戸発 10:24の「秋芳洞」行バスに乗り、11:20に「東行庵入口」に到着しました。運賃は880円でした。

右図は、約10年前に来たときに貰ったパンフレットです。また、下図は今回、下関市立東行記念館で貰ったパンフレットの裏にある図です。

東行庵は山縣有朋が別宅「無隣庵」を晋作の菩提を弔うために提供したところから始まります。梅処尼(ばいしょに)ことおうのが、晋作を弔うための新しい庵の建立を願い出て、井上 馨や伊藤博文らの支援により、明治17(1884)年に東行庵が創建されました。



2 奇兵隊陣屋跡

「東行庵入口」バス停から東行庵と反対方向に 10 分ほど歩くと「奇兵隊陣屋跡」(写真下左右)がありました。晋作が元治元(1864)年 12 月に挙兵し美東町、大田絵堂の内訌戦で勝利したのち、慶應元(1865)年 4 月、吉田に本陣を置きました。なぜこんな田舎に本陣を置いたのかと思いましたがこの町が赤間ヶ関から厚狭、船木(宇部市)を経て山口に至る山陽道本街道の所謂「かみがた道」と赤間ヶ関から長府、秋吉を経て萩に至る「萩街道」の分岐点に当たることがその理由だと分かりました。また、木屋川(こやがわ)が傍を流れていることから、船を利用した迅速な移動が可能であったこと、萩藩直轄地が現在の下関市地区には吉田・松屋以外に適地がなかったからだと思います。

兵舎、稽古場、講堂などの施設が完成したのは慶應 3(1868)年 8 月でした。陣屋の規律は厳しく、毎朝 6 時起床、8 時まで講堂で漢字の勉強、9 時から調練という日課でした。外出は隔日に 5 人一組で吉田地区内のみでの散策が許されました。石碑と奇兵隊士像は平成 14(2002)年 10 月 14 日に吉田観光協会によって建立されました。



3 吉田宰判勘場跡(よしださいばんかんばあと)

宰判というのは、萩藩領内に 18 個設けられた行政単位で、農村における裁判や年貢の収納を行いました。また、その中に郷校が設けられ、8 歳で入校し 15 歳で卒業するまで、士分、寺社、陪臣、有資格農商の子弟を教育しました。

春秋 2 回の試験の結果、成績優秀者は明倫館に進学できました²⁾ので、素晴らしい小中一貫校だったのです。

裁判所の「裁判」は、萩藩の「宰判」からきているという説もあります²⁾。

「勘場」というのは、各宰判に一つずつ設けられた役場のことです。



4 下関市立東行記念館

バスの出発時刻が 14:43 ですから、ゆっくり回っていられません(それを逃すと夕方に 1 本しかありません)。取り敢えず**東行記念館**に向かいました。

東行庵(写真下)を過ぎ、記念館の前に行きますと、安倍首相が寄贈された**高杉晋作像**(写真右)がありました。「平成 26 年 7 月 19 日 東行庵来所記念 第 96 代内閣総理大臣 安倍晋三」と書かれていました。少々やり過ぎじゃあないでしょうか、安倍さん！



記念館(写真下左)に入ると、1 階から 2 階に上がる踊り場の壁に、以前気になっていた写真が大きなパネルにして掲げてありました(写真下右)。左端の人物が**三谷國松**か、**山田顕義**か、晋作の従僕**高島某**かということですが、2 階の鉄の扉の中に若い男女の学芸員がいましたので尋ねましたら、美人の学芸員が「**三谷國松**です。明治になって品川駅長を務めました」と教えてくれました。



5 高杉晋作顕彰碑

この石碑は高さが 3m 以上あり、**伊藤博文**の文章が書かれています。明治 44(1911)年 5 月 20 日に除幕式が行われ、4km 先の国鉄小月駅からこの吉田まで、人力車が連なるほどの来賓が来ました。県知事や郡長も参列しましたが、何より大物は、東京から駆けつけた**井上馨**(77 歳)でした。

井上は除幕式の紐を引いたあと、初夏の暑い日差しの中で 2 時間もの大演説をぶちました(一説には、1 時間もいいます)。



高杉晋作顕彰碑序幕式(インターネットから)

このとき参列していた小学生たちは、日射病でバタバタ倒れました¹⁾。

私の母は大正 12(1923)年に豊浦郡豊東村下保木で生まれ、尋常小学校時代の遠足は東行庵だったといえます。入学したのは昭和 4(1929)年ころでしょう。当時の清水山(しみずやま)は禿山で、子供たちは木の枝を折ってそれに乗ってそり遊びをしたそうです。通学は草履、雨の日は下駄履きだったそうです。

6 晋作と梅処尼の墓

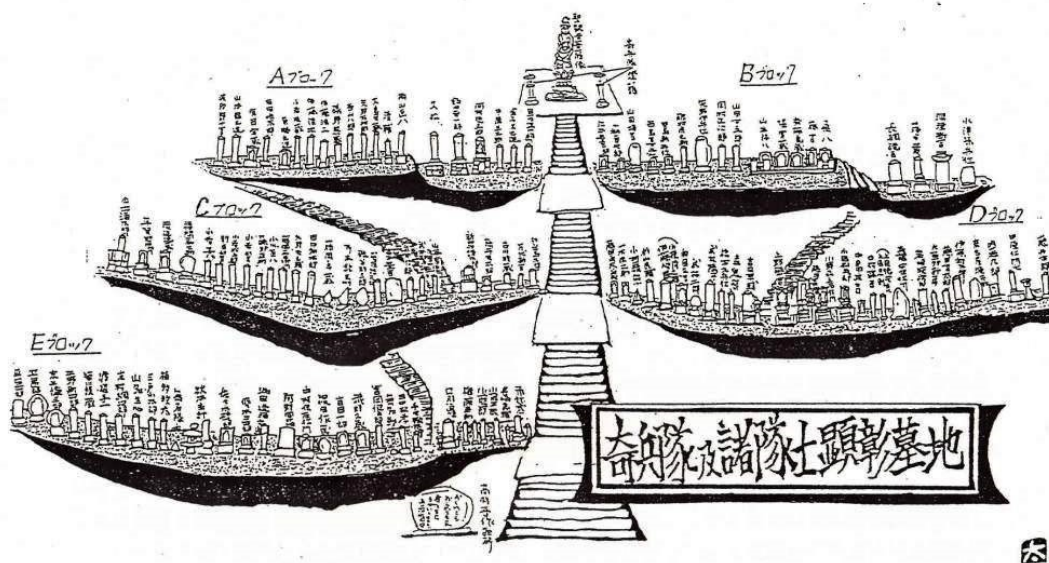
晋作の墓(写真下左)と梅処尼(ばいしょに、おうの)の墓(写真下右)です。



7 奇兵隊及び諸隊士顕彰墓地

(1) 墓地の全体図

奇兵隊及び諸隊(延べ160隊)の隊士のほとんどは十代、二十代の独身の若者でしたので、亡くなってもいつかは無縁仏になって忘れ去られる運命にありました。そこで、三代目庵主の谷玉仙尼(たにぎょくせんに)は、地元の世話人たちの支援を得て、清水山を造成して墓地にし、各地の隊士の墓碑を集めて祀りました。昭和 46(1971)年「晋作百五年祭」の記念事業だったそうですが、その後も新しく墓碑が建立されています。ここには、奇兵隊及び諸隊の解散命令に反抗して戦死し、招魂社にも靖國神社にも祀られなかった者や処刑された者たちも祀られています。「怨親(おんしん)平等」です。一坂太郎先生が作成したのが下図³⁾で、全部で 123 基あります。



(2) Aブロック

写真下はAブロックです。白石正一郎の墓碑もありました(写真下右)。



(3) B・Cブロック

写真下左はBブロック、写真下右はCブロックです。



(4) D・Eブロック

写真下左はDブロック、写真下右はEブロックです。



(4) 赤禰武人(あかねたけと)

今回は赤禰武人の墓に参ることが最大の目的でした。赤禰の墓(写真下左)はEブロックの、山頂に向かって右端にありました。写真下右が彼の写真¹⁾ですが、イケメンですね。



赤禰は天保9(1838)年、周防国柱島(はしらじま)の島医者・松崎三宅(さんたく)の長男として生まれました。優秀だったようで、島の庄屋・中富家の養子となり、さらに、萩藩の重臣・浦家の家老である赤禰忠右衛門の養子となって武士の身分を得ました。

月性、吉田松陰、梅田雲浜ら超一流の人物に教えを受け、尊攘運動に邁進して頭角を現します。文久2(1862)年12月12日には、高杉、久坂とともに品川御殿山の英国公使館焼き打ちに参加し、文久3(1863)年6月7日に竹崎で奇兵隊が結成されると真っ先に駆けつけ、10月からは総督を務めます。また、元治元(1864)年8月5日の四ヶ国連合艦隊の下関襲来に際し、前田砲台で必死に応戦しました。

しかし、元治元(1864)年7月12日の「禁門の変」(蛤御門の変)から、彼の人生の歯車が狂い始めます。7月23日に第一次長州征伐が始まると、萩藩は混乱して、9月下旬には藩の政権が恭順謝罪の「俗論派」に移りました。そして10月には奇兵隊や諸隊の解散を命じられます。そこで赤禰は、俗論派との妥協点を見出すことで難局を乗り切ろうと考えました。山縣狂介(有朋)ら奇兵隊や諸隊の幹部も同じ考えだったと思われます。四ヶ国連合艦隊との戦いで戦力を削がれた萩藩としては幕府軍と戦う余力はありませんでした。

しかし、11月になって晋作が潜伏先の九州から帰りますと、「俗論派を武力で打倒する」と訴えます。「朝敵の汚名を先ず雪いでから、萩藩としての一步を踏み出すべきだ」と考えた赤禰は、征長軍参謀の西郷吉之助(隆盛)に会い、協力を得ようとしています。晋作はしかし、赤禰の制止を振り切って、遊撃軍と力士隊の合計約80人を率いて新地の会所を襲撃しました。奇兵隊はこの際、動きませんでした。白石正一郎の日記には晋作たちは「暴拳党」と書かれたそうです¹⁾。

しかしこの後、戦局が変わります。晋作らが三田尻(みたじり)の海軍局を襲撃して軍艦を奪うと、下関近郊の若者たちが駆けつけ、豪農たちは軍資金の提供を申し出ます。動揺した奇兵隊や諸隊は長府の陣営を引き払い、下関と萩の中間地点の伊佐(いさ)に移って傍観態勢を取りました。

困った赤禰は、九州に行き三條実美ら五郷や西郷を訪ねて内戦の調停を依頼しました。ところが赤禰の留守中、奇兵隊ナンバー2の軍監・山縣狂介らが晋作の挙兵に呼応して俗論派の陣営に奇襲をかけてこれを破ってしまいます。

そんなところに赤禰が下関に帰ってきました。赤禰は「不義の者」「臆病者」と罵られました。奇兵隊や諸隊は、勝者となった晋作の兵に当初反対した手前、誰かを悪者にして晋作軍に合流す

る必要があったのです。赤禰を悪者にした立役者は、山縣かもしれません¹⁾。

そこで赤禰は晋作らに申し開きをすればよかったのですが、「なまじに云訳だてして、犬死にの恥をかき候わんより、すみやかに去る」と述べ、久留米藩脱藩の淵上郁太郎(ふちがみいくたろう)と共に、京にいる西郷を頼ろうと船で向かいますが、大阪で幕府に捕えられ、8ヵ月間京都の牢に入れられました。

やがてこの間、**第二次長州征伐**の話が出て、この話を聞いた赤禰は、「自分が幕府と萩藩の間を周旋してみせると訴えて聞き入れられ、11月16日、淵上とともに広島で釈放されました。しかし、藩は藩主から一民衆まで「決死防戦」で団結しており、赤禰に調停の余地は残されていませんでした。

赤禰は失意のうちに故郷の柱島に潜伏します。これによって赤禰に対する評価はさらに悪くなり「幕府に内通したために釈放された」「幕府から15万石を約束されたお墨付きを持っている」という噂が流れ、藩の捕吏に捕えられて、一度の審問もないままに慶應2(1866)年1月25日、山口の鯉石河原で斬首に処されました。享年29歳でした。

赤禰は獄衣に「真は誠に偽りに似、偽りは以て真に似たり」と記しました。これは辞世の句として墓碑の右側に記されています(写真右)。赤禰は招魂社にも靖國神社にも祀られず、復権を許されませんでした。

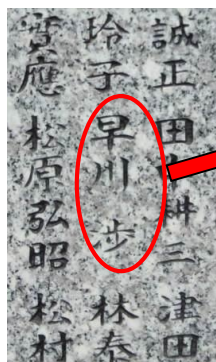
赤禰家を継いだ篤太郎は「故赤禰武人に対する贈位申請」を提出し、半官半民の審査組織「史談会」が妥当と認め、貴族院及び衆議院においても採決されましたが、元老の山縣有朋と奇兵隊出身の軍人政治家三浦梧楼(ごろう)の猛反対にあって流れました。明治44(1911)年ころの話です。維新殉難者への贈位は昭和19(1944)年に打ち切られました。

昭和46(1971)年「晋作百五年祭」に際し、谷玉仙尼は関東の遺族に手紙を送り、奇兵隊墓地への墓碑建立を勧めた結果、平成7(1995)年11月11日に墓碑が完成しました。その際に参列したのは、六十数名の多きに上ったそうです。



おわりに

バスの出発時刻が迫ってきましたので墓地を離れようと思い、山から下りてきましたら「古川 薫文学碑」があり、その設立に携わった方の名前を読んでいて「早川 渉」という名前を見つけました(写真右)。たぶん同期生の早川君だと思えます。彼は闘病中だと聞いていますが、頑張ってください。



(おわり)

<参考文献>

- 1) 「長州奇兵隊」(一坂太郎著 中央公論社 2002年10月25日)
- 2) 「その後の長州五傑」(松野浩二著 東洋図書出版(株) 平成23年9月1日初版)
- 3) 「奇兵隊および諸隊士顕彰墓地」(一坂太郎著 東行庵 平成8年10月20日初版)

(その9)角島(2015年10月29日)

はじめに

10月10日(土)~12日(月)の間、13日(火)~14日(水)の大分出張を利用して下関に帰りました。そこで11日(日)、兼ねてからの念願であった角島(つのしま)訪問を行いました。

1 特牛(こっとい)駅

私は山陰線の列車に過去いつ頃乗ったのか覚えていません。下関駅から09:03発の「小串」行列車(写真右)に乗り、09:45に小串駅に着き、09:50発の列車に乗り換えて、10:20に特牛駅に到着しました。運賃は840円でした。

写真下上左は同駅のホーム、写真下上右はその駅舎です。駅前には、乗車券発売所の廃屋(写真下下左)がありました。病院が1軒あるほかは、住宅以外の建物はありませんでした。駅に向かって右隣に「奇蹟の鐘」というのがありました(写真下下右)。



平成17(2005)年に「四日間の奇蹟」という映画が上映され、特牛駅は「伊上畑駅」として登場したそうですから、奇蹟の鐘もその映画に登場したのでしょう。

実家に帰って母(92歳)に、「初めて特牛に行ったよ」と言いましたら、「初めてじゃないよ」と言われました。母と結婚する前の父は、門司の神戸製鋼所に勤めていたのですが、空襲が激しくなって疎開を命じられて兄のいる下関に移住し、母と結婚しました。

父はその頃、幡生の国鉄の工作部門で班長をしていました。私が生まれた時代は、お米がないので、門司で岩塩を買って特牛に行き、塩1升と米1升を交換して帰ったそうですが、警察の目を逃れるために、米を背負い、その上に1歳前後の私をおぶって帰ったそうです。ですから、私にとって特牛は初めての訪問地ではなかったのです。

2 恩徳寺の結びイブキ

今回の旅の目的の一つは「恩徳寺の結びイブキ」と対面することでした。下図を参照して下さい。特牛駅発のバスは10:50でしたので、30分の待ち合わせです。タクシーもありましたが、貼紙によると角島燈台まで3,920円です。恩徳寺があるのは肥中(ひじゅう)で、タクシー代はあまりかからないとは思いましたが、17日(土)~18日(日)の伊勢市の陸自航空学校の記念行事に元整備部長として参加するため、あまり小遣いは使えず、経費節約のためにバスを待ちました。今までこんなに長時間バスを待った経験はありません。

時間潰しのために、持ってきた「プレツェルブラックペッパー味」をつまみにペットボトルに入れてきた焼酎「黒白波」を飲みました。貧乏旅行ではありませんが、売店がありません。



特牛駅バス停から10:50に乗車し、11:00に肥中バス停に着きました。料金は170円でした。バス停から徒歩5分の恩徳寺(写真右)は観音霊場長門第二十八番で、同寺は天文20(1551)年に大内義隆の側室お花の方によって大内氏の没後、その菩提を弔うために建立されました。お花の方は身重のまま肥中に逃れ、尼となって同寺を建立、女の子を産んでのち産後の肥立ちが悪く、亡くなってしまいました。残された子供もお花と名付けられ叔父に預けられますが、その叔父が商売で失敗し、借金の肩代わりに遊女として売られてしまいました。



そのお花と親しくなったのが海の番人重蔵でした。重蔵も幼いときに両親と死別し、淋しい身の上でした。二人は愛し合うようになりましたが、お花が重い病にかかり、治療のために身受けをしようと考えた重蔵は、幕府が朝鮮に派遣する僧侶一行の宿に忍び込み、献上品を盗んで金に変えようと試みましたが見つかってしまい、許す代わりに僧侶の弟子となって朝鮮に行くことを命じられました。重蔵はお花に「三年後に帰ってくる」と言って朝鮮に行ったのですが、帰って来たのは数十年後でした。それまでの間、お花は毎日恩徳寺に参り、重蔵の無事を祈ったそうです。

偉い僧侶が帰って来たというので肥中では沸き立ちました。しかし、僧侶が見たのは、石を積み上げただけの、お花の墓でした。僧は朝鮮から持ち帰ったイブキの苗をそのお墓の元に植えさせました。

二人の魂が睦み合っているような枝の形が、実に不思議です。



説明板によりますと、昭和 30(1955)年 10 月 26 日に**国指定天然記念物**となりました。天明 4 (1784)年 8 月の「**恩徳寺縁起**」には、「境内二稀樹**円柏**アリ 大サ五尺マワリ余 幹ノ高サ凡ソ式間半葉枝四方延ビタル事拾歩二近シ往昔其枝才前後二結ビコシラエタルニシテ稀有ノ珍木ナリ」と書かれており、「**円柏**」というのが、このイブキのことであろうということです。



境内に「**さすり地蔵**」(写真下左右)がありました。扉を開いてみますと、のっぺらぼうのお地蔵さんが鎮座していました。一説によると、お花が重蔵を偲びながら撫でたからだとわれています。



写真下左は、恩徳寺から眺めた**肥中港**です。バス停に戻る途中の左側の丘の上に「**天満宮**」という氏神様があり(写真下右)、お参りました。



バス停に戻りましたが、次の角島行きバスは12:33ですから、今度は1時間以上の待ち時間があります。周囲にお店はなくレストランの表示があったものの3km先なので、肥中港でまた焼酎を飲み、つまみを食べながら下関駅で買った産経新聞を隅から隅まで読みました。そこで、「**吉田松陰留魂録**」(古川薫著・講談社学術文庫)を持参していたことを思い出し、読み返してみました。

今NHK大河ドラマで話題になっている群馬県令の**榎取素彦**のように、**野村 靖**(入江九一の実弟)が神奈川県の権令(ごんれい、副知事)に就いており、**沼崎吉五郎**(松陰が入った牢の牢名主。福島藩士・能勢久米次郎の元家臣で、殺人容疑をかけられ入牢)が、明治7(1874)年に三宅島遠島を許されて本土に帰り、同9年、野村に複製されたもう一冊の「**留魂録**」と「**諸友に語(つ)ぐる書**」を届けたことが書かれていました。沼崎が十数年間隠し持っていたものを持ち帰ったのであり、沼崎の偉大な業績に改めて感謝しました。元々の「留魂録」は失われたそうですから貴重です。

バスの発車時刻の10分前になったので、停留所のベンチに坐りましたが、暴走族と思しき単車が数十台、ひっきりなしに、五月蠅い排気音をたてながら目の前を通過していきました。

肥中発12:33のバスに乗り、学校横に12:46に到着しました。料金は330円でした。写真下は**角島大橋**に差し掛かったところです。橋の美しさに、実に感動しました。この橋の設計をしたのは東京の八千代エンジニアリング(株)です。陸上自衛隊を1尉ころに退職して当社に入り、山口大学の博士課程を卒業した防大同期のS君が社長をしていた会社です。彼は砂防の専門家です。

小学校横の駐車場はほとんど満杯で、食べ物屋はすべて長い行列ができていました。さすがに日曜日です。物産館で買った一口蒲鉾などを肴に、残った焼酎を飲みました。

帰ったあとで、駐車場の傍に貸し自転車屋さんがあるのを知ったのですが、そのときは気付きませんでしたので、とりあえず「**つのしま自然館**」に歩いて向かいました。



3 つのしま自然館と角島燈台

つのしま自然館(写真下左)の整理解説員Fさん(写真下右)の説明は素晴らしかったです。



入館料は 200 円(高校生以下は無料)でした。以下は F さんが説明された内容です。

島の北東部には牧場があり、平安時代から牛を飼っているそうです。そして、平安時代には、牛車用に年間 2 頭を天皇に献上していたそうですが、海上をどうして運んだかという、牛に 2km ほど泳がせたそうです。対岸には選ばれた役人の若者が待機していて、2~3 日間、牛を休ませます。役人の名称は「こといのやくえ」と呼んだそうですが、「ことい」は「特に」という意味と「元気な雄牛」という意味があるようで、ここから「こっとい」という地名が生まれたそうです。なんでも、北九州にも、「ことい」という地名があるそうです。

角島大橋は平成 12 年に完成したそうですが、真っ直ぐでなくカーブを描いている美しさで何かのデザイン賞を貰ったそうです。平成 10 年 9 月 10 日、**和田さん**という漁師の船が海士ヶ瀬の岩礁に衝突して壊れてしまいました。ぶつかったのは岩礁ではなく、鯨らしいということになり、**中野さん**という漁師が素潜りで 10m ほど潜って綱を付け、船で牽引して持ち帰りました(写真下左)。

獲物はみんなで分けて食べるという習慣でしたが、農水省から「待った」がかり、四日間かけて調査が行われ、89 番目の新種だということが分かりました。通常は第一発見者の名前が付けられるのですが、今回は「ツノシマクジラ」と命名されました。写真下右は、その骨格標本のレプリカで、本物は国立科学博物館にあるそうです。その後、世界で 18 回ほど発見されているそうです。



再び歩いて**角島燈台**に行きました。この燈台は明治 9 年に建造された総御影石造りのもので、今も現役だそうです。当時、日本には建造技術がなかったため、スコットランドから**ブランドン技師**が来て、手作業で建設しました。



非常に混雑した狭い 105 段の階段を登って、眺めた風景が下左右の写真です。



4 万葉歌碑

燈台を出て、角島小学校にある万葉歌碑(写真右)に行きました。

「角島の 瀬戸(迫戸)のわかめ(海藻)は
人のむた 荒かりしかど わが(我が)むたは
にぎめ(和海藻)」と記されています。

「角島の瀬戸のワカメは他人には荒々しくて
なびかなかったが、私には優しく素直であった」と
いう意味で、中央から派遣された防人が、角島の
純情な乙女をワカメになぞらえて詠んだ歌だそうです。

奈良平城京跡から出土した木簡には「長門
国豊浦郡都濃嶋出釋海藻 天平十八年三月二

十九日」とあり、角島のワカメが、奈良時代から天皇の食膳に供されていたことが分かります。選ばれた若者たちは、往復 1 ヶ月かけてワカメを都に運びました。

奈良時代、平安時代に、このように遠くにある離れ小島から都まで、ワカメや牛などを運んだのですから、かなり驚きです。ついでですが、「中国地方」という呼び名は、都と太宰府の間にある国だから付けられたと記憶しています。



5 戦没者の追悼碑

16時過ぎに食堂に行ってみますと、大衆食堂のほうには列ができていないので、入って「イカ焼きセット」を頼みました。グラス生ビールとイカ焼きで500円はリーズナブルでした。イカは柔らかく、ビールも美味かったです。

帰りのバスは17:09ですから、また待ち時間ができました。物産館で母にお土産の蒲鉾を買い、学校横のバス停でふと前を見ましたら、何か白くありげな門柱がありました(写真下左)。入ってみますと、広場の奥に「招魂碑」(写真下右)があり、揮毫は小澤太郎知事でした。



その左側には、「日露戦争の戦没者名の碑」(写真下左)がありました。また、右方向には「郷友会解散の碑」(写真下右)がありました。

郷友会というのは、旧軍軍人の会ですが、この碑の裏側を拝見しますと、設立されたのが昭和27年8月15日、解散したのが平成7年8月15日となっていました。戦没者の慰霊や郷友会などの行事はいつまで続けるのかということですが、多分、角島の場合は、高齢化が進むにつれて、会の運営が困難だと判断されたものと思います。我々自衛官OB有志も日本郷友連盟や偕行社などに参加し、支援しています。



6 帰路につく

特牛駅までのバスの乗客は私だけで、17:33に到着し、料金は460円でした。同駅では灰色と白色が混ざった太った二毛猫にまわりつかれ閉口しました。私が持っているビニール袋の中に蒲鉾が入っていたからかもしれません。

特牛駅 17:52 発、滝部駅 17:59 着、同駅で乗り換えて 18:19 発、下関駅 19:25 着で帰りました。写真右は滝部駅まで乗った列車です。行き先が「益田」に変更されました。



下関駅のエスカレーターを降りて左に行くと、「かわ本」というお好み焼きの店(写真下左)があったので入りました。「焼そば」を頼みましたら、店長が目の前の大きな鉄板で、すごい量の焼そばを作り始めました。そんなに食べられないと恐怖感を覚えました。結果的にはそれは3人前だと分かり、安心しました。



実家に帰り母と話していると、「角島大橋ができたお蔭で泥棒が増えた」ということを知りました。釣れなかった釣り客が、イケスの魚を盗んでいくのだそうです。たしかに、住宅街を歩きますと、ゴミの不法投棄を警告する表示が目につきましたので、旅館や土産物業者などは別として一般住民の皆さんは苦勞されていると思います。暴走族も確実に増えたことと思います。



下関を立つに当たり、駅構内のスーパーで「ぶちうまい」という味噌(写真右)を買いました。かなり以前、吉川順一君から「よゆできちよる」という味噌もあると聞きました(赤味噌と白味噌の違い)が、未だあるのでしょうか？ちなみに、カミさんが「先入れ先出し」の補給の原則を守っているため、「ぶちうまい」をまだ味わっていません。

おわりに

今回の旅はバスの待ち時間が非常に長く、これを「無駄時間」ではなく「人生のひとときをゆっくり楽しむ時間」ととらえることができましたような気がします。



(おわり)

(その10)彦島(2016年7月24日)

はじめに

7月16日(土)～19日(火)の間、3年前に亡くなられた**則松君**のお墓に参るとともに、去年の11月以来会っていない**母**の顔を見るために、下関に帰りました。今回は友人の車に乗せてもらい、18日(月)に生まれて初めて彦島(ひこつとらんど)を訪れました。

1 則松君のお墓参り

御承知のように、**則松襄志君**(中学を卒業するまでは通称の**克之君**)は平成25(2013)年9月12日に肺癌で亡くなりましたが、小学校の校長を三度務められるなど、山口県の教育行政に貢献されました。日新中3年7組の「仲良し六人組」は高校を卒業するまで、何度か一緒に遊びました。

椋田睦美さん、**西郷里美さん**、**西山佳子さん**、**神田昌明君**、**則松襄志君**、そして私の6人で、このグループは佳子さんによって「**ガラクタグループ**」と命名されました(写真右)。

高校卒業以来行方が分からない**神田君**を除く5人が最後に会ったのは、平成19(2007)年7月11日、唐戸の**グランドホテル**でした。このときは、岩国から**則松君**が奥さんと一緒に車で来てくれました。

垢田にお住まいのお姉さん、岩国の奥さん、お姉さんのお宅の近くに5年前に名古屋から帰って住んでおられるお姉さんの息子さん及び我々4人は、御両親と**則松君**が眠る関山墓地の**則松家の墓**にお参りし、お坊さんに経を上げていただきました。則松家のお墓は、偶然ですが村川家累代の墓のすぐ傍でした。

墓参後は、唐戸の「**喜膳(きぜん)**」で、お姉さんに豪華な食事を御馳走になりました。



1964.1.3 太平山にて



写真左は墓石の裏側で、「昭和54年8月吉日則松襄志建立」とある。右端にお姉さんが写っている。写真上は墓前の奥様。

2 彦島の概要

ウィキペディアによると、彦島地区(下関市役所彦島支所が所轄する地域)は、彦島本島、六連島、竹ノ子島及び巖流島(舟島)から成るそうです。本土とは、「関彦橋(かんげんきょう)」、「下関漁港閘門(こうもん。小瀬戸水門。地元の人には「彦島水門」と呼ぶそうです)及び「彦島大橋」の三つのルートでつながっており、面積は、本島が 9.8 km²、全島で 11.26 km²だそうです。

地名の由来ですが、日本書紀に「引島」というのがあり、鎌倉時代になって吾妻鏡に「彦島」の名が出てきて、二通りの名称が用いられるようになったが、最終的に「彦島」となったそうです。その理由の一つは、壇ノ浦の戦いの際に本陣を置いた平家が、「引くは武士にとって縁起が悪いから」と考えたからだとか。

彦島は、造船業、重化学工業及び水産加工業などが盛んなようで、ネットによりますと、三菱重工業下関造船所、下関三井化学、彦島精錬(三井金属関係会社)などがあるそうです。

下の航空写真と右の図は、インターネットから引用しました。



3 彦島大橋とナイスビューパーク

初めて彦島大橋(写真下左)を渡りましたが、角島大橋ほどの感激はありませんでした。

写真下右は「ナイスビューパーク」の風車です。目的地を絞って来ましたので、立ち寄りませんでした。西山海水浴場は流石に「海の日」らしく、賑わっていました。ネットで見ますと「ひこっとらんどマリンビーチ」と呼ぶようです。



4 彦島八幡宮

写真右は彦島八幡宮です。ネット記事によると、次のように書かれています。

平治元(1159)年、彦島開拓の祖といわれる河野通次(こうのみちつく)が漁の最中に海中で光り輝く物を発見しました。不思議に思って引き揚げますと、それは裏面に八幡尊像が彫られている鏡だったのです。通次はその鏡を一族の護り本尊であると感得し、「光格殿」という祠を建立して、これを納めました。これが、彦島八幡宮の発祥となりました。

通次の体験は今日、市の無形文化財「サイ上がり神事」として伝えられています。

これは、神事の中で、通次役が、御尊像に見立てた櫛を弓で差し上げ、「さあ上がった」と発することから命名されています。この神事は、10月に行われ、羽織・袴姿の子供たちが海面をはねるトビウオの踊りを行い、次いで、鎧・兜に身を包んだ通次役が、海中に見つけた御神体を引き上げる舞を舞うそうです。



5 南風泊市場(はえどまりしじょう)

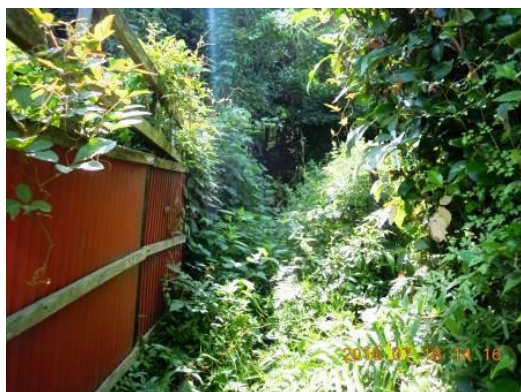
写真右が南風泊市場です。御承知のように、全国で唯一、「ふく」を専門に取り扱う市場です。朝の3時台から袋セリが始まります。子供の頃、袋セリを見たことがありますが、「よくこんなやり方で計算を間違えないなあ」と感心したものです。

市場の手前に「ふく楽舎」がありましたが、休日にもかかわらずブラインドが下りていたのが気になりました。



6 清盛塚

「清盛塚」(江の浦町3丁目1番)は、案内表示板がなく、周囲は「4丁目」と表示されており、分かりづらかったのですが、地元の方に聞いてかろうじて登り口(写真下左)を発見しました。密集した草をかき分け、蚊に喰われながら登りますと、鉄塔の横に塚(写真下右)がありました。ここは、1185年4月25日(旧暦3月24日)の壇ノ浦の戦いの際、平家軍が砦を築いていた場所だそうです。



説明板によりますと、寿永 3 年(1183 年とありますが、1184 年かもしれません)中納言平 知盛は、亡き父平 清盛の遺骨を携えて彦島に入り、平家最後の砦「根緒城」(ねおじょう。この場所に築かれました)の築城に取り掛かり、この丘陵の小高い場所に納骨して墓碑を建立しました。

知盛は翌年の寿永 4 年、壇ノ浦の合戦に出陣しましたが、再興の夢とともに海中に没しました。墓碑は永年無銘のままで放置されていましたが、昭和 4(1929)年、地元の歴史に詳しい方たちによって「清盛塚」と刻まれたそうです。

7 弟子待(でしまつ)

(1) 地名の由来

慶長 17 年 4 月 13 日(1612 年 5 月 31 日)、舟島における決闘のために、佐々木小次郎が舟に乗り込んだところ、弟子が 3 隻の舟に乗って追いかけてきました。小次郎が引き返すよう命じたため、仕方なく近くの岸に舟を着けて待っていたことから、この地を「弟子待」と呼ぶようになったといわれています。

ただ、その 782 年前、「類聚国史」(るいじゅうこくし)の天長 7(830)年の項に記載されている「勅旨田」という地名が、「てしまち」とも読めるそうで、元々あったこの名称が、巖流島の決闘のちに、代わりに「弟子待」という字が充てられるようになったともいわれています。

(2) 巖流島の決闘

今回は訪れませんでした。彦島地区の一部なので、付記します。

写真右は、ネットから引用した武蔵・小次郎の銅像の写真です。小次郎像が 2002 年 12 月、武蔵像が 2003 年 4 月に建立されています。「遅いぞ、武蔵！」といっても、あまりにも遅すぎます。制作されたのはそれぞれ別の作家です。予算の制約があって年度を跨いだのかもしれない。



実は、小次郎は遅刻していないという見方があり、年齢も、18 歳だとか、50 歳以上だとか、まちまちです。小次郎は小倉藩の剣術師範で、「岩流」(がんりゅう)という流派を作りました。吉川英治は、「錦帯橋で燕返しを編み出した」と書いていますが、それは完全にフィクションで、錦帯橋が出来たのは、巖流島の決闘の 60 年後だそうです。

小次郎は一人で島に行ったのに、武蔵のほうには、細川藩から四人の加勢があり、決闘後、息を吹き返した小次郎を殺害したといわれています。しかし、これも、小倉藩の反小次郎一派の者が殺したという説があって、すべては謎です。また、それとは別に、佐々木巖流という別の人物がいて、天寿を全うしたといえますから、どうも、二人が一人の人物として描かれたようです。

(3) 海軍水雷発射基地

昔は「海軍山」と呼ばれていたようですが、弟子待 3 丁目に「彦島南公園」があり、そこから海岸に降りたところに、「海軍水雷発射基地」と呼ばれる場所があります。しかし、ここも、案内標識はまったくありません。人があまり訪れないようにしているのか、市が力を入れていないのか…。

ネットを見ましたら、「日露戦争の際、ロシア・バルチック艦隊の万が一の関門海峡侵攻に備えて、明治 35(1902)年に構築された」となっていますが、こんなに早くバルチック艦隊が来襲することを予測することは難しかったと思われ、これは明治 37(1904)年の誤りではないでしょうか。

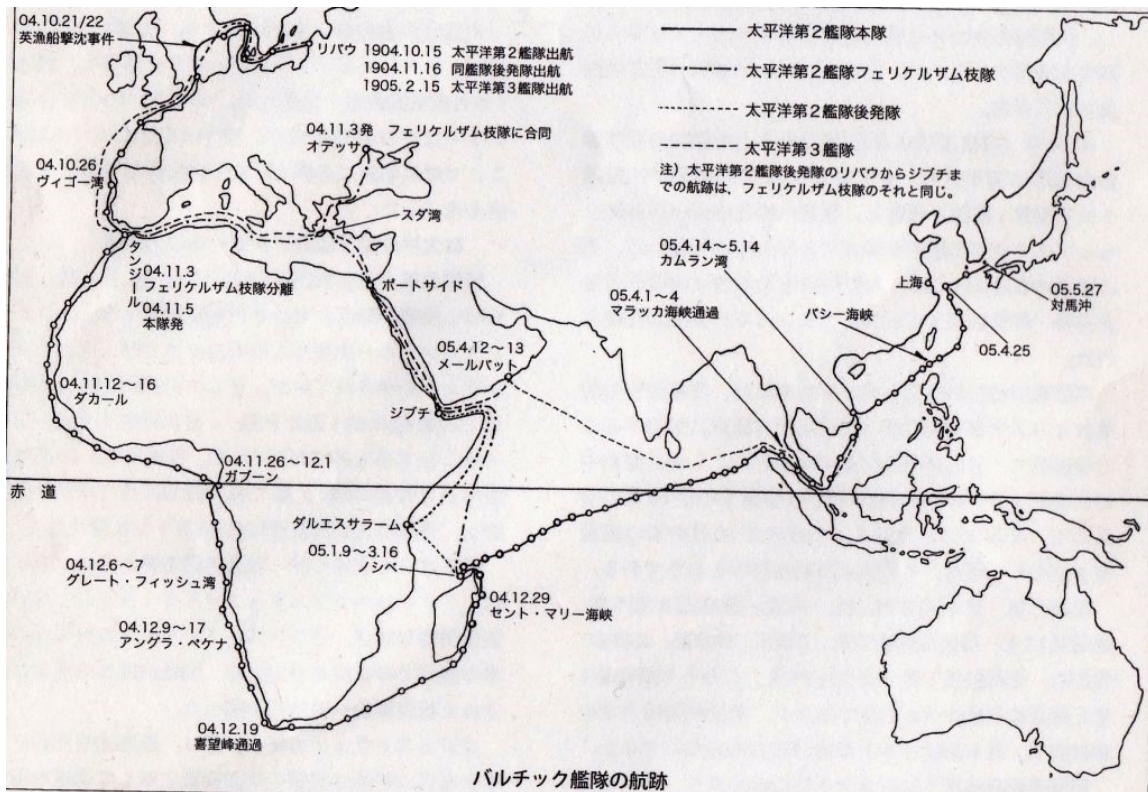
写真下左は「突堤」、写真下右は突堤の山側にくり抜かれた「水雷貯蔵庫」です。



ロシア艦隊は、バルト海、黒海、太平洋の三つの海域に存在しましたが、明治 37(1904)年 3 月に太平洋艦隊が壊滅したため、太平洋艦隊を「第 1 太平洋艦隊」、バルト海にあった艦隊を「第 2 太平洋艦隊」として、同年 10 月 15 日にリバウから出港させました。次いで明治 38(1905)年 2 月 15 日に同港から「第 3 太平洋艦隊」が出港しています。

黒海艦隊は、クリミア戦争後に締結されたパリ条約によって、戦争中は、ボスボラス海峡とダーダネルス海峡を通過できないことになっていました。したがって商船に扮した仮装巡洋艦 3 隻が参加しただけでした。そして、「太平洋第 2・第 3 艦隊」が明治 38 年 5 月 27 日に対馬海峡で我が海軍と戦いましたが、この艦隊は通称「バルチック艦隊」と呼ばれています。

下図は「世界の艦船」2005 年 5 月号から引用したバルチック艦隊の航路図です。



日英同盟によって、有事の際はお互い中立とされていましたが、英国は石炭の供給をサボタージュしましたので、ロシアはやむを得ずドイツに依頼しました。スエズ運河を閉鎖した訳ではありませんでしたが、艦隊の半分は喜望峰を回りました。また、ベトナムにおいてもフランスから意地悪をされ、港湾から締め出されました。

日本海海戦には、我が国から40隻の水雷艇が参加しました。バルチック艦隊は、一目散にウラジオストクを目指すはずですので関門海峡を通過する可能性はなく、彦島の基地は、魚雷の貯蔵と水雷艇の出発基地であり、「水雷発射基地」である可能性は低いものと思われます。

(4) 攘夷戦砲台跡

ネットには、「海軍水雷発射基地の傍にある」と書かれていましたが、標識も何もなく、分かりませんでした。文久3(1863)年、攘夷戦に備えるために、彦島各地にも砲台が設置されました。彦島は長府藩の領地で、設置された7門に対し、同藩の約600名が配置されました。指揮者は萩藩の砲術隊「萩野隊」の守永弥右門でした。

同年5月10日に攘夷戦が開始され、前田と壇ノ浦の砲台が、5月11日、23日、26日と砲撃したものの、6月1日、5日に報復攻撃を受け、1年2ヵ月後の元治元(1864)年8月5日には、英仏蘭米の四ヶ国による攻撃が開始され、攻撃は8日まで続きました。彦島の砲台が火を噴くことはありませんでした。

写真右はネットから引用した攘夷戦砲台あとです。



おわりに

7月19日(火)、福岡空港に行くために下関駅から博多方面行の列車に乗りましたら、「関彦橋」が見え(写真右)、今まで意識せずに何十回もボンヤリと列車に乗って鉄橋を通っていたことに気がきました。

おまけに、関門トンネルの入口は彦島にあり、いつもこの土地にお世話になっていたのです。

ウィキペディアにある「三つのルート」は誤りで、正確には「四つのルート」であることを認識しました。

ヒコットランドよ、有難う！

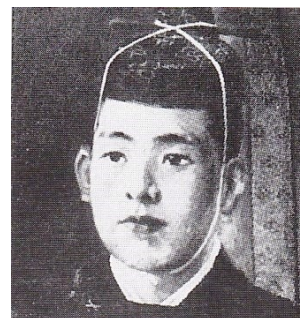


(おわり)

(その11) 中山神社・本宮中山神社(2016年11月8日)

はじめに

11月7日(月)午後の熊本での仕事のために下関に帰りました。今回は友人の車に乗せてもらい6日(日)、初めて「中山忠光卿遭難の地」(豊北町の本宮中山神社)を訪れました。平成24(2012)年10月8日に綾羅木の中山神社に初めてお参りましたが、本宮中山神社にお参りしなければ、中山忠光卿遭難の件は完結しないと思っていましたので、たいへん感慨深いものがありました。因みに旧暦11月8日の今日は忠光の命日です。



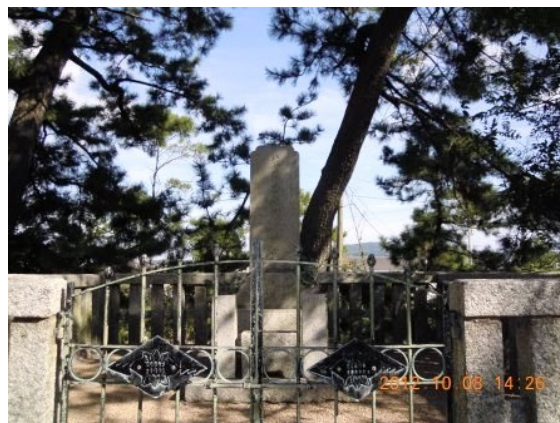
中山忠光¹⁾

1 中山神社(綾羅木)

本神社は、暗殺された元治(げんじ)元(1864)年の翌年の慶應元(1865)年11月、長府藩の支藩・豊浦藩によって、墳墓の場所に「中山社」として祀られたのが始まりです。忠光は、はじめは暗殺された田耕(たすき)に埋葬されましたが、幕府が広島で検死をするために経由地の赤間関に輸送中に夜が明けたため、人目を避けるために、この地に埋葬されました。墓碑銘には「藤原忠光」と記されていますが、これは、中山家の先祖が「藤原家」であったことと、本人であることを隠すためという意味があったようです(写真下右)。



中山神社(綾羅木)(筆者撮影)



中山忠光の墓(綾羅木)(筆者撮影)

中山忠光の墓の説明板(山口県教育委員会・下関教育委員会)には、次のように書かれています。「国指定史跡 中山忠光墓 昭和16年8月1日指定」。

「中山忠光は、幕末に国事に奔走した尊攘急進派の少壮公家。弘化2(1845)年4月、中山忠能(ただやす)の七男(注1)として出生。安政4(1857)年、従五位下に叙せられ、同5年侍従に任じられた。また、万延元(1860)年には、甥にあたる睦仁(むつひと)親王(のち明治天皇)に祇候(しこう)(注2)した。

若年時から諸藩の志士たちと交わる。特に文久2(1862)年以降は、国事御用掛に任じられた父・忠能の許に出入りする武市瑞山(たけち・ずいざん)・久坂玄瑞(くさか・げんずい)・吉村虎太郎(よしむら・とらたろう)・真木和泉(まき・いずみ)等の尊攘急進派と交際し、次第に尊攘公家の代表的な存在となっていく。文久3(1863)年2月、19歳の若さで国事寄人(こくじよりうど)(注3)に任じられたが、3月の攘夷祈願の賀茂行事に供奉(ぐぶ)したのち、下関での攘夷戦に参加するため、官位を辞し、京都を脱して来関した。竹崎浦の白石正一郎邸に寄宿し、5月には久留米に赴き、獄中にあった真木和泉を救出した(注4)。6月、吉村虎太郎等と帰京し、孝明天皇の攘夷祈願のための大和行幸を

画策。また、この攘夷親征に呼応するため、吉村虎太郎・松本奎堂(けいどう)等と天誅組を結成し、8月17日に大和五条で倒幕の兵を挙げた(天誅組の変)。しかし、8月18日の政変により孤立し、十津川で幕府軍の討伐を受け敗退。その後、下関に落ちのび白石家に潜伏したが、長府藩により幽閉され、藩内各所を転々とした。禁門の変、下関戦争、その後の第一次長州征伐により、尊攘運動が挫折した元治元(1864)年11月、幽閉先の田耕(たすき)村杣地(そまぢ)(豊北町)で長州藩保守派に暗殺され、この地に埋葬された。享年20歳。のちに明治新政府から正四位を贈られた。

< 筆者注 >

注1:「参考資料1」では「五男」と書かれています。

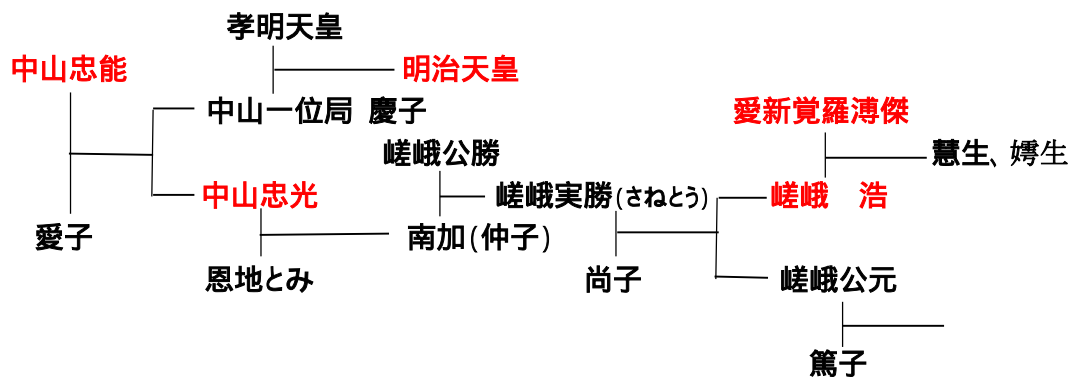
注2:祇候(しこう)とは、謹んで貴人の傍にはべることです。

注3:国事寄人(こくじよりうど)は、「よりゅうど」とも読み、国の政治上の事務を行う吏員です。

注4:勤王派の中心として久留米藩の藩政改革を建白した罪を保守派から問われ、蟄居を命ぜられていました。

2 愛新覚羅社(綾羅木)

本神社は、昭和63(1988)年、中山神社境内に建立されました。下図のように、忠光の姉・中山一位局は孝明天皇の妻であり、忠光は明治天皇の叔父に当たります。曾孫の嵯峨 浩(ひろ)は、初代満洲国皇帝・愛新覚羅溥儀(あいしんかぐら・ふぎ)の弟溥傑(ふけつ)の妻となりました。溥傑、浩と長女・慧生(えいせい)の生前からの希望により、遺骨が当地に祀られています。



愛新覚羅社(筆者撮影)



浩の歌碑(筆者撮影)

慧生は、昭和31(1956)年12月4日頃(発見されたのは10日)に、天城山中において学習院大学の同級生大久保武道と無理心中(?)で亡くなり(当時19歳)、浩は昭和62(1987)年6月20日、北京で病死しました(73歳)。嫖生(こせい)は妹です。同年12月12日には、溥傑が納骨のために

来日しています。溥傑は、平成 6(1994)年 2 月 28 日に北京において 86 歳で病死しています。

3 長州藩の立場の激しい変化

長州は常に危ない橋を行き来してきました。結果的に明治政府の中心に立てたのですが、それは、数人の優れた指導者がいたからか、運がよかったからなのか、恐らく両方だと思います。藩主の毛利敬親(たかちか)(注)は、「そうせい侯」と呼ばれ、御前会議で自分の意見を述べなかったのですが、前藩主が、就任後 19 日で死亡(毒殺か?)していますので、それが影響したのかもしれませんが、結果的に萩藩が滅亡に至らなかったのが幸いでした。

安政 7(1860)年 3 月の**桜田門外の変**によって幕府は**朝廷宥和策**に転じ、文久元(1861)年 3 月に長州藩直(じき)目付・**長井雅楽**(ながい・うた)が「航海遠略策」を藩主に説き、これが我が国の国是として広まったことで、長州藩は表舞台に立ちました。長井は藩内の尊攘派と対立していました。

文久 2(1862)年 1 月 15 日、諸藩連合ではなく、幕府独裁による公武合体を志向する老中**安藤信行**が水戸・宇都宮両藩士に襲われて負傷するという「**坂下門外の変**」が起きて幕府の権威が失墜し、これを機に薩摩藩と土佐藩が長州藩追い落としを画策し、**島津久光**は勅使・大原重徳の護衛を名目に兵を率いて上京し、公武合体の主導権を獲得しました。

また、岩倉具視や久坂玄瑞らは朝廷工作を行って、長井の説は朝廷を誹謗するものだとこれを失脚させ、長州藩は長井に責任を取らせて文久 3(1863)年 2 月 6 日に切腹させました。敬親は自分が褒めて幕府に進言させておいて、実に薄情なことをしました。長州藩は尊攘派が強くなり、公武合体から「**破約攘夷**」へと大きく転換しました。乗り遅れていた土佐藩も上京してきました。

しかし、三條実美(さんじょう・さねとみ)ら長州派公家は、やり過ぎました。大和行幸を隠れ蓑に討幕軍を決起させようとしたので、孝明天皇は京に戻れなくなるのではないかと不安を感じ、気持ちを汲んだ中川宮が会津及び薩摩と組んで長州勢力を京から追い出しました(8 月 18 日の**政変**)。

長州軍 2,600 は退去し、**三條実美**、**三條西季知**(さんじょうにし・すえとも)、**東久世通禧**(ひがしくぜ・みちとみ)、**壬生基修**(みぶ・もとなが)、**四條隆調**(しじょう・たかうた)、**錦小路頼徳**(にしきこうじ・よりのり)、**澤宜嘉**(さわ・のぶよし)は西下し、これが「**七卿落ち**」と呼ばれています。

8 月 29 日、**棕梨藤汰**(むくなし・とうた)・**村岡伊右衛門**(むらおか・いえもん)らの保守派が敬親に謁見を求め、直目付の**毛利登人**(のぼる)と**前田孫右衛門**、表番頭格・**周布正之助**の罷免を要求すると、敬親は、この 3 名を更迭しました。しかし、**高杉晋作**が抗議すると簡単に 3 名が復職しました。敬親というのは、ずいぶんいい加減な、多分、他に類を見ない指揮官でした。おまけに、保守派重鎮の**坪井九右衛門**(つぼい・くえもん)が結党強訴(けつとうごうそ)の罪で切腹まで命じられました。

これによって、長州藩は尊攘で統一され、京都における失地回復を目指しました。基礎となったのは、**真木和泉**の「**出師三策**」(すいしさんさく)で、世子・**定弘**が兵を率いて上京し、嵯峨・嵐山を拠点として京都を制圧するというものでした。11 月 8 日には、長州藩家老・**井原主計**(いはら・かずえ)が「**奉勅始末書**」を提出し、長州藩のこれまでの行動の弁明と長州藩の上京を打診しました。

やがて、長州嫌いの公明天皇と長州厳罰論の慶喜の影響により、幕府内部では、毛利敬親・定広父子を江戸に召喚して糾弾せよという声が上がりましたが、諸藩の足並みは揃いませんでした。そして公武合体派の混乱で尊攘派の公卿が元気を取り戻し、元治元(1864)年 5 月 27 日には、14 藩の志士が会合し、長州復権運動の一本化について協議しました。

そのような情勢下で 6 月 5 日に「**池田屋事件**」が起き、これを契機として福原越後、来島又兵衛、真木和泉、久坂玄瑞らの部隊約 1,500 人が洛外に迫りました。「**四箇条の大義**」を掲げましたが、長州嫌いの孝明天皇には聞き入れられず、7 月 19 日に「**禁門の変**」(蛤御門の変)となり、7 月 24 日には長州征討の勅命が下って、長州藩は「**朝敵**」となりました。

< 筆者注 >

注:毛利教明(のりあき)は、天保8(1837)年に家督を継ぎ、従四位下に叙され、将軍・徳川家慶(いえよし)から「慶」の偏諱を賜り、「慶親(よしちか)」となりました。その後、禁門の変によって長州藩が「朝敵」とされ、幕府の意向による勅命によって官位と賜字が剥奪されて「敬親(たかちか)」となりました。面倒ですので、終始「敬親」を使用します。長州藩では、長州を毛嫌いした一橋慶喜が大嫌いで、年号が「慶應」に代わっても、存在しない「元治三年」や「元治四年」などと墓碑に書いています。

4 中山忠光卿遭難の経緯

「卿」という字は三位以上を指すため、三条実美と三条西季知のみ「卿」ですが、「七卿落ち」というように、身分の低い公家を含め敬意を込めて、そう呼んでいます。忠光も四位ですから、正確には「忠光卿」とは呼べません。「二卿五朝臣」が正確です。

元治元(1864)年11月8日(9日と書かれている文書もあります)夜、田耕(たすき)村(現・豊北町田耕地区)で、中山忠光卿が7人の刺客によって撲殺によって暗殺され(刀傷を残さないため)、19年7ヵ月の生涯を閉じました。驚くことに、この刺客の中に、小西和憲君の曾祖父がいました。

忠光は、文久3(1863)年3月26日、長州藩の攘夷に参加するために、侍従職を捨てて無断出奔し、森俊斎(秀斎)と改名して来関し、久坂玄瑞率いる光明寺党の党首として外国船砲撃に参加しました。その後、京都で姉小路公知(あねがこうじきんととも)が暗殺されると6月1日、同志を引き連れて京都に帰り、8月17日、「天誅組」主将として大和五条の代官所を襲撃して討幕の兵を挙げますが、彦根藩・紀伊藩などの兵に敗れて大阪に脱出し、従者6人を引き連れて長州に逃れて来ます。天誅組の変は、幕府に対する尊攘派の初めての武力蜂起として重要な価値がありました。

忠光は、初めは萩藩の弥富村(現・須佐町)に潜んでいましたが、萩藩の要請により、11月中旬から長府藩が預かることになり、庭田村(現・豊田町)、延行(のぶゆき)村(現・下関市)、上畑村(現・豊北町)、大河内村、川棚村、室津村(以上現・豊浦町)(参考文献2を引用していますので、平成11年現在の市町名です)と移り住み、室津観音院から元治元(1864)年8月末に田耕村にやってきました。

忠光を慰めたのが、下関の廻船問屋・恩地与兵衛の娘で当時19歳のトミでした。忠光が田耕村に来たときは妊娠3ヵ月で、トミの介護のために母親が付き添っていました。また、長府藩からの警固役として国司直記(こくしなおき)が従っていました。

この頃長州は、禁門の変や馬関戦争に敗れ、15万の長州征討軍を迎えなければならない立場にありました。そこに征長総督府から、①禁門の変責任者の処罰、②藩主父子の謝罪書提出、③山口屋形の破却、④五卿の九州移転を行えば処分を緩めるといふ提案がありました。これは、参謀の西郷吉之助の案でした。藩の保守派はすぐにこれに飛びつきました。「五卿」となっているのは、錦小路頼徳が元治元年に病没、澤宣嘉は生野の変で拳兵後脱出して伊予小松藩周辺で匿われた後に長州に行きますが、当時、五卿が長州にいたからでした。11月2日には西郷が岩国に来て約束の履行を迫り、気の毒にも長州藩によって3人の家老が切腹させられました。

この際、西嶋量三郎氏(参考文献2の関係稿執筆者)は、「幕府は、中山忠光については、数々の罪状(①倒幕挙兵、②官位詐称、③偽勅。天誅組挙兵の際、侍従職を称し、新政府を五条に置いた)に鑑み、このまま放置しておくとも幕府の威信が丸つぶれになると考え、萩藩との間で忠光暗殺の密約があった」と見ます。こうして最も嫌な役が長府藩に押しつけられ忠光が暗殺されたのです。

小西君の話では、暗殺のリーダー(野々村三九郎だと思います)は翌年の夏、蚊帳の中で昼寝中に、萩藩(?)からの刺客によって、証拠隠滅のために暗殺されたそうです。しかし、功山寺には彼の立派な墓があるそうです。また、不思議なことに、小西君のお父さんが長府小学校の先生をしていたときの教え子の一人が、リーダーの子孫だったそうです(小西君のお母さんの話)。

トミは、翌慶応元(1865)年5月に一粒種の仲子を出産しましたが、この人こそ悲劇の王妃愛親覚羅浩の祖母でした。

5 本宮中山神社

滝部駅から豊田方向に向かい、国道435号線を田耕神社の手前で左折し、中山神社方向に行く途中に、大田新右衛門旧宅(写真下左右)がありました。現在の建物は新しくなっていますが、忠光一行は、この家に引きこもり、宮原力蔵という雑役夫が雑事を引き受けました。



10月中旬、白滝山麓の四恩院に移そうとしましたが、何らかの原因で移せず、山奥の一軒家である大林万次郎宅に移りました。しかし、庄屋・山田幸八の忠告によって11月5日夕、再び大田家に移り、8日夜、発熱で伏せていた忠光を誘い出し、長瀬の溪谷で待ち伏せていた刺客により殺害されたのです。幸八はこれまで万事を仕切っていたのですが、最後には気の毒にも先導の役をさせられました。



現在の大田家(筆者撮影)



本宮中山神社全景(筆者撮影)



本宮中山神社神殿(筆者撮影)

本宮中山神社の起源は新しく、昭和 38(1963)年 10 月、豊北町が催した忠光卿百年祭を記念して建立されました。想像したよりも規模が小さいという印象でした。

神殿の左手には、「中山忠光朝臣遭難之處」の大きな石碑があり、その手前に「血染の岩」という小さな石碑が立っています。その下の岩が、襲われた場所にあった大岩を取り除いた際に一塊を残したものだそうです。また、右手には、手前に「愛新覚羅御夫妻参拝記念植樹」の石碑がありました。日付を見るのを忘れましたが、夫妻は昭和 49(1974)年 12 月と昭和 55(1980)年 10 月に里帰りしていますので、たぶん后者の時期に植樹されたものだと思います。奥に忠光辞世の句「思ひきや野田の案山子の梓弓 引きも放たで 朽ち果つるとは」の石碑がありました(写真下左右)。この辞世の句は非常によくできていますが、実際には忠光の句ではないそうです。



神殿左側の石碑(筆者撮影)



神殿右側の石碑(筆者撮影)

写真右は神社の左手の小川です。このような場所で暗殺されたのでしょうか。境内にはこのほか、「三笠宮殿下、妃殿下参拝記念植樹」の石碑(平成 5 年 4 月 29 日)と、「嵯峨公元御夫妻参拝記念植樹」の石碑(昭和 50 年 2 月 15 日)がありました。

三笠宮殿下が亡くなられた直後でもあり、感慨深いものがありました。



神社脇の小川(筆者撮影)

おわりに

忠光の死後 152 年を経た今日、年月の開きを実感せざるを得ませんでした。

私の座右の銘は、吉田松陰の「留魂録」にある一節「今日死を決するの安心は 四時(しじ)の順環(じゅんかん)に於て得る所あり」です。これは、古川薫先生の注釈⁴⁾によると「今日、私が死を目前にして平安な心境でいるのは、春夏秋冬の四季の循環ということ考えたからである。十歳にして死ぬ者には、その十歳の中におのずから四季がある。二十歳にはおのずから二十歳の四季が、三十歳にはおのずから三十歳の四季が、五十、百歳にもおのずから四季がある」ということです。中山忠光卿は、若くしてその濃厚な人生の四季を走り抜けた人でした。

(おわり)

<参考文献>

- 1) 「別冊歴史読本幕末維新グラフィック150人の群像」(株)新人物往来社 1998年2月12日発行
- 2) 「歴史物語シリーズ⑥下関豊浦歴史物語」瀬戸内物産(有)出版部 平成11年10月30日3版
- 3) 「長州戦争」野口武彦著 中公新書 2006年3月25日
- 4) 「吉田松陰 留魂録」古川 薫著 (株)講談社 2011年4月19日 22刷

(その12) 先帝祭・船戸与一・長府(2017年7月2日)

はじめに

二ヵ月前になりますが、5月3日(水)~8日(月)の間、8月で94歳になる母の顔を見に下関に帰りました。4日(木)には美祿市の大田・絵堂を訪問しましたので、その他の日の体験を書きます。

■ 先帝祭・上臈参拝

5月3日(水)、小倉空港からバスと列車で昼の12時過ぎに下関駅に着きました。コイン・ロッカーに旅行カバンを預けて駅でエビ天うどんを食べ、上臈参拝を見ようと、バスで赤間神宮に行きました。小学生のとき以来約60年振りです。12:42に赤間神宮に着きましたが、水天門の中には招待者以外は入れてもらえません(写真下左)。因みに、上臈参拝は、壇ノ浦の合戦の翌年の文治2(1186)年以来行われているそうです。

仕方なく、水天門前で待つことにしました。しかし、柵の傍にはあまり人がいませんので、私は一番前に立てました。するとすぐに「豆タンク」みたいなおばちゃんが寄ってきて、「最近はさびれたねえ」と話しかけてきます。「私は小学生以来なので、よく分かりません」と答えましたが、どんどん話しかけてきます。警備の人に「何時から始まるの?」と聞きますと、「13時からです」と答えます。13時丁度に振袖太夫の参拝が始まりました(写真下右)。彼女は、こちらから聞きもしないのに名前やプライベートの話を、まるで機関銃のように発射し続けます。以後Tさんと書きます。



最初の上臈の外八文字(写真右の左)のあと、次が出てきません。Tさんがまた警備員に聞きましたら「25分置きに5名が参拝します」とのこと。



。「あんた、どこから来たの?」「東京です」「東京の人だったら、こんなに待たされるの我慢できないやろ?」「まあ、そうですね。因みに、写真上右が二番目の上臈だったと思います。

Tさんは6月29日で67歳になるそうです。元看護師で、現在、川棚の老人介護施設に勤務しているとのことでした。維新・海峡ウォークに初めて参加したとか、体重が65kgあるとか、乗用車がマニュアル・ギアだとか、最近接触事故を起こしたとか、細かい話を盛んにされましたが、すべてを公開すると差し障りがありますので省略します。「帰ろうかな」という顔をしますと、「まだ帰らないでよ」と言いますので、止むを得ず3名の上臈の参拝を見て失礼しました。

私は「晴れ男」で、今の職場に入って8年間、仕事で雨に降られたことはありませんが、今回は3年振りに晴れて上臈参拝が実施できたそうですから、皆さん私のお蔭です。

旅行カバンを下関駅のロッカーから出すために、唐戸バス停のベンチに坐った瞬間、年配の女性が傍に坐り、Tさんと同じように「先帝祭は寂しゅうなったね。昔は田中絹代や小暮実千代が出たけどねえ」と言います。76歳だそうで、私はなぜか年配の女性にもてる雰囲気を持っているようです。「昔は竹崎のバーの女給が上臈をやったんじゃが、街がさびれてしもうて、店が少のうなり、今は日本舞踊を習いよる大学生が上臈をやっとるんよ」と、これもTさんと同じことを言います。

5日に「田中絹代ぶんか館」に行ってみましたら、写真がありました。写真撮影が禁止されていますので、インターネットから写真を引用させていただきます。

昭和43(1968)年4月24日、明治維新百年記念の先帝祭で、田中絹代と小暮実千代が特別参加しました。絹代が上臈を務める話もありましたが、絹代は、当時人気を集めていた実千代に上臈を勧め、自分は禿(かむろ)を買って出たそうです。



小暮実千代(左)と田中絹代(右)(インターネットから)

■ 第32回ものせき海峡まつり

3日、上臈参拝を見たのち、初めてこれを見ました、上臈参拝にはあまり人がいませんでしたが、こちらは、すごい人でした。「豊田(とよた)ほたる祭」の紹介(写真下左)と観客(写真下右)です。



出店(写真右の右)も非常に賑わっていました。

ここでは、生ビール(400円)と鯨の竜田揚げ(300円)を頂きました(写真右の左)。



■ 武者行列

思いがけず武者行列に出会いました。ほんとうに久しぶりの武者行列でした(写真下)。懐かしい風景でした。



■ 船戸与一(ふなど・よいち)常設展

5日、下関西高同期の**原田三樹彦君**の三歳上のお兄さんである**船戸与一**の常設展示を見るために「**田中絹代ぶんか館**」(写真右)を訪れました。

市内と北九州市在住者は65歳以上、その他の地域の在住者は70歳以上が無料でした。長生きはするものです。



直木賞作家の船戸与一(本名:原田健司)は、昭和19(1944)年2月8日、下関市に生まれました。下関西高から早稲田大学法学部に進み、小学館、祥伝社などの勤務を経て、昭和54(1979)年、「**非合法員**」で冒険小説家として作家デビューし、平成12(2000)年、「**虹の谷の五月**」で直木賞を受賞しましたが、胸腺癌で平成27(2015)年4月22日に亡くなりました。昨年、当館で追悼展が行われたそうです。

館内では写真撮影ができないので紹介できないのが残念ですが、著書や自らの勉強のために集めた本約200冊が展示されていました。満洲や旧日本陸軍に関する著書や参考図書が多く、元自衛官として強いインパクトを受けました。

今年4月8日の門前仲町「はなぶさ」における西高同期生会に初めて参加した原田さんと会って船戸さんの存在を知った自分が恥ずかしい限りです。



船戸与一(インターネットから)

■ 長府庭園

5日、「**ガラクタグループ**」の4名で唐戸セントラルホテル「**cafe resta uzura**」で昼食会をし、その後、**長府庭園**を散策しました。(その10)で書きましたが、このグループは日新中3年7組の6名がなんとなく集まってできました。**則松襄志君**が平成25(2013)年9月12日に亡くなり、**神田昌明君**が高校卒業以来消息不明であるために、現在4名となっています。

長府庭園では、65歳以上は無料であるものの、市外在住者には特典がなく、入場料200円を支払いました。この庭園は、長府毛利藩家老・**西運長**(にし・ゆきな)の邸宅跡で、31,000㎡の広さがあるそうです。私は初めて訪れましたが、素晴らしかったです(写真下左右)。



庭園内の東屋の前で、少年劇団が高杉晋作の決起の様子を演じ、晋作が病床にあって野村望東尼と詠んだ連歌「おもしろきこともなき世をおもしろく」「すみなすものは心なりけり」の唱和をしていました。

不思議なことに翌日、新町1丁目のときわ公園傍にその歌碑があるのを見つけました(写真右)。裏には、「平成11年12月12日建立 維新史回廊構想推進協議会 下関・維新の史跡を守る会山口県平成維新塾」とありました。



■ 亀山八幡宮

6日、亀山八幡宮を参拝しました。皆さんおなじみのお宮ですので「何を今更！」と思われるでしょうが、敢えて書かせていただきます。

ここに砲台がありました(写真右)。実は、文久3(1863)年5月11日午前2時、久坂玄瑞の指揮のもと米国商船攻撃の初弾が発射されたのが、この亀山砲台でした。6月1日、藩主が亀山八幡宮で夷敵降伏を祈願したところ、御利益があったのかその後、社殿・兵に損害はありませんでした。



因みに北から、城山台場(串崎城)、前田茶屋台場、洲岬台場、御駕籠立台場、杉谷台場、壇之浦台場、御裳川台場、八軒屋台場、亀山台場、専念寺台場及び福寺台場が設置されていました。

献燈(写真右)は天明5(1785)年のもので、その傍に「お亀茶屋跡」の説明板がありました。伊藤博文は、慶應元(1865)年の初夏に刺客から逃れるためにここにあった茶屋にやってきて、お茶子の木田梅子に出会い、翌年二人は夫婦となりました。



説明板には、明治42(1909)年凶弾に倒れた博文を偲んで詠んだ梅子の歌が記されています。「国のため 光をそへて ゆきましし 君とし思えど 悲しかりけり」。梅子は77歳まで生きました。

お亀明神(次頁写真)には「お亀さん頌徳(しょうとく)の記」という説明板があり、それによると次のとおりです。明神社は平成元(1989)年に亀山八幡宮鎮座千百三十年記念事業として再建されました。

境内は島でした。江戸時代の初期に陸続きの工事が開始されましたが、潮流が激しいために難渋しました。そこで稲荷町のお亀が人柱となって工事が完成しました。土地の人は、お亀の霊を慰めるために、境内に銀杏の木を植えました。すると不思議なことに、あばたのあったお亀さんのように、実は複数の斑点が出るので「お亀ざんなん」と名付けられたそうです。お亀さんの功績により開作された広い埋め立て地を「八丁浜」(はっちょうはま)といい、毎年5月1日から三日間、五穀祭に「八丁浜(やっちゃま)エラヤチャとはやし、「ぽんち可愛いや寝んねしな」と唄い、山車を出して練り歩くそうです。



■ 長府散策

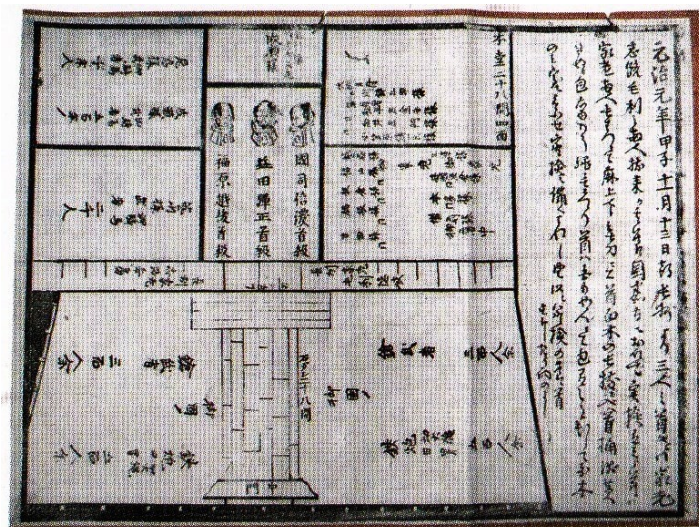
6日、長府の新しい下関市立歴史博物館を初めて訪問しました(以前行ったときは工事中でした)。バス停から檀具川沿いに歩くと、桂 弥一旧宅に出会いました(写真下左)。現在は茶屋「祥」となっています。説明板によりますと、桂 弥一は嘉永2(1849)年11月、長府藩士・桂助左衛門の子として長府侍町に生まれ、少年時代は乃木希典と共に私塾・集童場に学び、深い友情に結ばれました。晩年、功山寺境内に尊攘堂(のちの長府博物館)と万骨塔(無名志士の忠魂碑)を建立しました。昭和14(1939)年、89歳でこの家で亡くなったそうです。

さらに歩くと、立派な博物館がありました(写真下右)。常設展示 200 円、企画展示 100 円ですが、市外居住者でも 70 歳以上は両方無料でした。

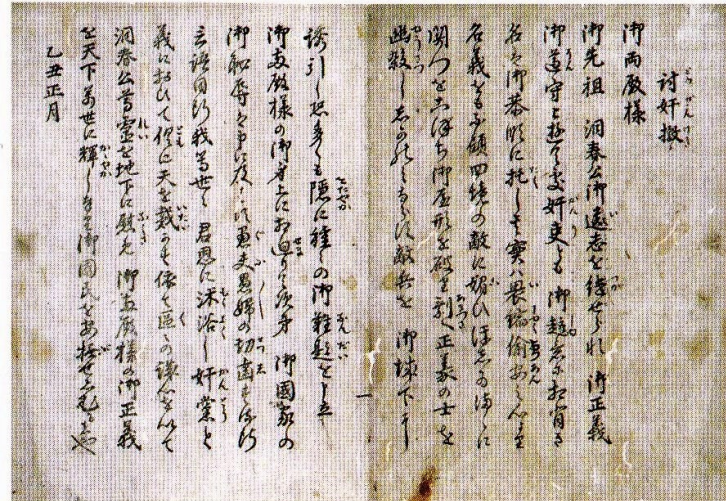


「晋作が翔けた下関」(4月1日～5月28日)の展示が行われおり、貴重な資料が多数展示されていました。

写真右は、プログラムから引用した元治元(1864)年11月に広島国泰寺で行われた三家老の首実検の様子です。俗論党に詰め腹を切らされた家老、向かって左から福原元圃(もとたけ)益田親施(ちかのぶ)、国司親相(くにし・ちかすけ)の首の図が描かれています。



写真右は同じくプログラムから引用した慶應元(1865)年1月、大田・繪堂の戦いに際して藩主と世子に送った檄文です。文章は高杉晋作が考えましたが書体が異なり、書いた者は別人だとされています。文面は以下のとおりです。



討奸檄(とうかんげき) 御両殿様 御先祖 洞春公御遺志を継(つが)せられ 御正義御遵(うん)守被遊候処奸吏(かんり)とも 御趣意に相背き名は御恭順に托し其実八畏縮偷安之心より名義をも不顧四境の敵に媚ひほしめまに 関門をこぼち御屋形を破り剩へ正義の士を幽殺し しかのミならず敵兵を御城下に誘引し 恐多くも隠に種々の御難題を申立 御両殿様の御身上に相迫り候次第 御国家の御耻辱は申に及ばず愚夫愚婦の切齒する所 言語道断我等世々 君恩に沐浴し奸党と義におひて俱に天を戴かす 依て区々の誠心を以て 洞春公尊霊を地下に慰め 御両殿様の御正義を天下萬世に輝し奉り 御国民を安撫せしむる者也 乙丑正月

改修が終わった功山寺を訪問しました。境内の高杉晋作像(写真下左)に再会しました。三条実美に対し、例の「いまから長州男児の肝っ玉をお目にかけて」と述べているのが、この像です。写真下右は長州藩士・三吉慎蔵の墓です。三吉は、寺田屋事件で槍を振るって坂本龍馬の命を助けました。



■ 唐戸市場

3日と6日に唐戸市場を訪問しました。3日は、500円の海鮮丼が超人気でたいへん賑わっていました(写真下左)。6日に勇次水産の前を通ったら、稲村シツエさんに出会いました。シツエさんから、お土産を頂きました(写真下右)。ラッキー！



■ おわりに

旧市役所前を歩いていましたら、「こころん」(写真下左)に出会いました。下関のユルキャラなんですか？

そういえば山口県のゆるきゃらに「ちよるる」というのがいましたが、今の活動状況はどうなっちよるのでしょうか？写真下右はネットから引用した「ちよるる」の写真です。



何日だったか、赤間町のふく料理屋つか佐さんの前で3年9組の藤永吉久君に会いました。帰郷するたびに新しい発見と出会いがあり、幸せを感じています。

(おわり)

(その13) 金子みすゞ (2017年11月26日)

はじめに

94歳の母が今月の6日、妹のマンション近くにある福岡県春日市の老人ホームに転居しましたので、23日(木)に菩提寺から父のお骨を頂き、昨日、千葉に持ち帰りました(お墓は15年前、千葉に建てました)。

このシリーズも13回目となりました。下関の借家を12月末に大阪の大家さんにお返しし、泊まる場所はホテルしかなくなりますので、とりあえずこの回が一応の区切りとなります。

今回は、11月13日(月)の熊本出張に併せて下関に寄り、11月12日(日)に金子みすゞゆかりの「みすゞ詩の小径」を歩き、その後23日~24日にも下関に寄りましたので、その様子をお送りします。下関在住の方には、さして目新しさはありませんが…。



みすゞ詩の小径

モデルコース

みすゞ詩の小径

表の情報がかわい
い子を持つ

所要時間
約1時間

11月12日(日)のコース

A 旧秋田商会ビル②
スタート
観光情報センター、みすゞに関する展示コーナーがあります。
徒歩約7分

B 上山文英堂本店跡
みすゞが一時住んでいた場所。終焉の地でもあります。
徒歩約3分

C 金子みすゞ顕彰碑(寿公園)①
徒歩約4分

D 黒川写真館跡
20歳の記念写真を撮ったといわれている場所です。
徒歩約4分

E 弁財天橋
みすゞの詩が左右の欄干にあります。
徒歩約1分

F 商品館跡(上山文英堂支店)
上山文英堂の支店があったところで、みすゞが働いていた場所です。
徒歩約5分

G 詩碑「日の光」
平成9年3月に彫刻シンポジウム実行委員会が設置しました。(碑製作者:石野耕一)
徒歩約5分

H 詩碑「夏越まつり」(龜山八幡宮)⑤
平成15年12月に龜山八幡宮御神婚人會十周年記念事業として設置されました。
徒歩約5分

I 三好写真館跡
みすゞが亡くなる前日に、写真を撮った写真館です。
徒歩約1分

J 唐戸市場前ゴール

※写真提供:金子みすゞ著作権保存会

■ 旧秋田商会ビル

以前訪れたのですが、仙崎の余韻があり、1階の「金子みすゞコーナー」をもう一度見学しました。



最期の写真を撮ったといわれるカメラ



旧秋田商会ビル

写真右は、亀山八幡宮の絵葉書ですが、左端に一部、三好写真館が写っています。

このコーナーにはみすゞの童話集や関連記事の載った雑誌が多数展示されています。この写真が自殺した前日の昭和5(1930)年3月9日に撮られた写真です。



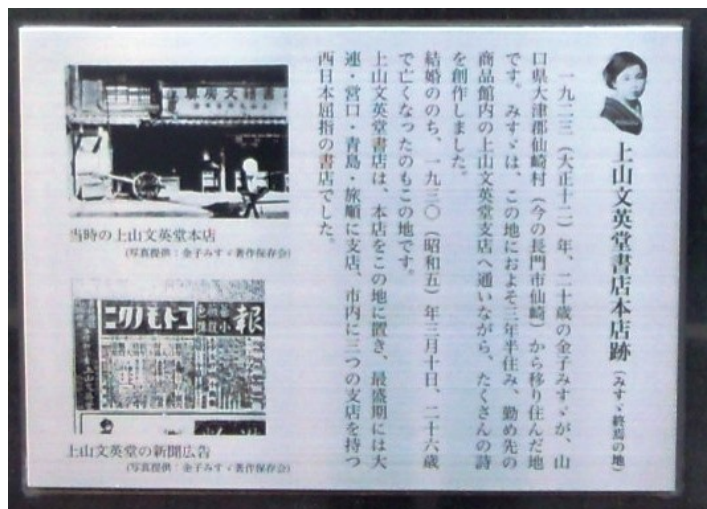
亀山八幡宮傍の三好写真館(左端)

■ 上山文英堂本店跡

明治安田生命下関ビルの裏に記念碑があります。みすゞはここで亡くなりました。



本店跡記念碑



写真は、本店(上)と新聞広告(下)

碑に刻まれた詩は「みんなを好きに」でした。

この地は金子みすゞが亡くなった上山文英堂なのかその年の秋に新築された同店なのか分かりません。

■ 金子みすゞ顕彰碑

寿公園内にありました。詩は「蜂と神さま」でした。これは、こんなに短い文で表現された非常に深い仏教思想であり、私の最も好きな詩です。

蜂と神さま

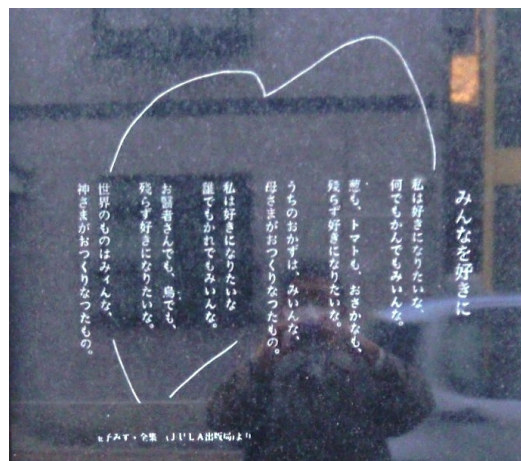
蜂はお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
土塀(どべい)は町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。

さうして、さうして、神さまは、
小ちやな蜂のなかに。

■ 名池の井戸水

「ふく処 喜多川」の入り口右側に、竹筒からこんこんと湧き出ている水を発見しました。「名池の井戸水」だそうで、以下の説明文がありました。

平安時代、醍醐天皇第二皇子空也上人が諸国を巡錫し、天曆の頃(947年～956年)、当店から北へ400mの東蓮寺で念仏を広めた。山裾が海に接し、飲料水に不自由していた当時の里人を上人は哀れに思い、持っていた錫杖を地面に突き立てた。のちに里人が、この杖を抜き取ると、その穴から泉が湧き出た。そして、誰ということなく「名池の井戸水」と称された。名池小学校の校歌に、「空也上人 ほりしちょうくしき泉のわくところ」と歌われている。



みんなを好きに



顕彰碑



名池の井戸水

■ 黒川写真館跡

黒川写真館跡は、現在、村田写真館となっています。みずゞが20歳の記念写真を撮った場所です。



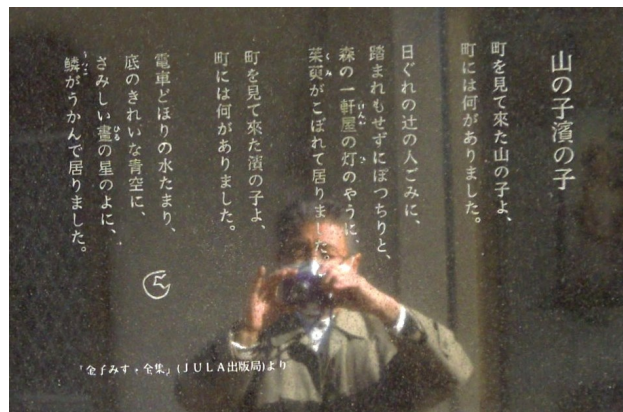
黒川写真館跡(現村田写真館)



記念碑

電車どほりの水たまりに鱗が浮かんでいますので、これは明らかに下関を綴った詩だといえます。仙崎には路面電車はなかったでしょうから。

マスクをした私が心霊写真のように写り込んでおり、怖いです。



山の子濱の子

■ 弁財天橋

田中絹代ぶんか館前の橋が「弁財天橋」という名であることを、今回初めて知りました。

橋の両側にそれぞれ1枚の詩額が掲げられていました。

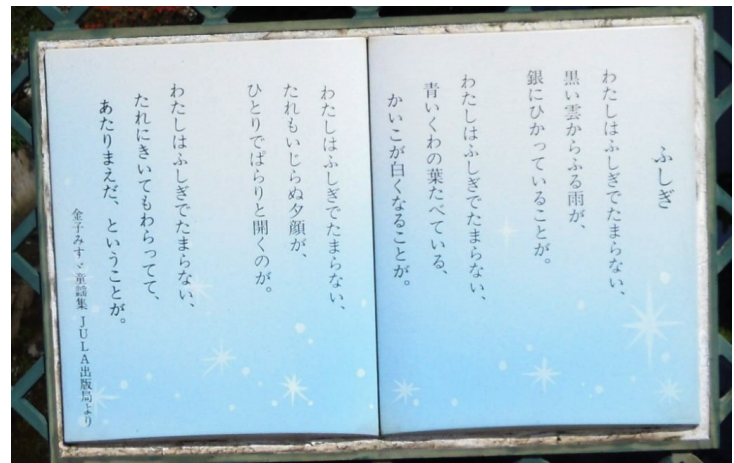


弁財天橋



すなの王国

「すなの王国」は、西之端の商品館で、たった一人の店員として働いていたときのことを綴ったのだと思います。上山文英堂から歩いて10分ほどで、着物の上から事務服を着て、座布団に坐り、本を読みながら店番をしていました。至福の時だったでしょう。



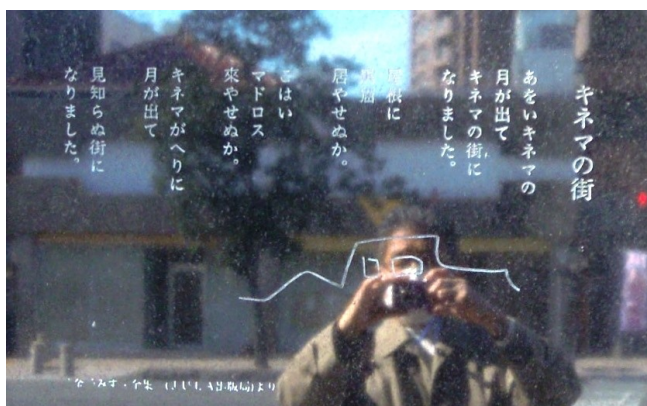
ふしぎ

■ 商品館跡

商品館跡は、現在山口銀行の支店になっています。「キネマの街」は明らかに下関です。みすゞは下関の街には、あまり馴染めなかったようです。



商品館跡記念碑



キネマの街

■ 詩碑「日の光」

カラトピアの裏に平成9(1997)年3月、彫刻シンポジウム実行委員会が設置した詩碑「日の光」がありました。



詩碑「日の光」(カラトピア裏)

最後のフレーズには実に感動します。「残った一人はさみしさ。(私は「影」をつくるため、やつぱり一しよにまゐります。)」。私もこの先、このような人生を歩みたいものです。

■ 夏越(なごし)まつり

亀山八幡宮の境内に「夏越まつり」の詩碑がありました。境内は七五三のお参りで賑わっていました。夏越祭りは全国的に行われており、炎熱の夏を迎え荒廃しがちな心を清める禊の神事だそうです。

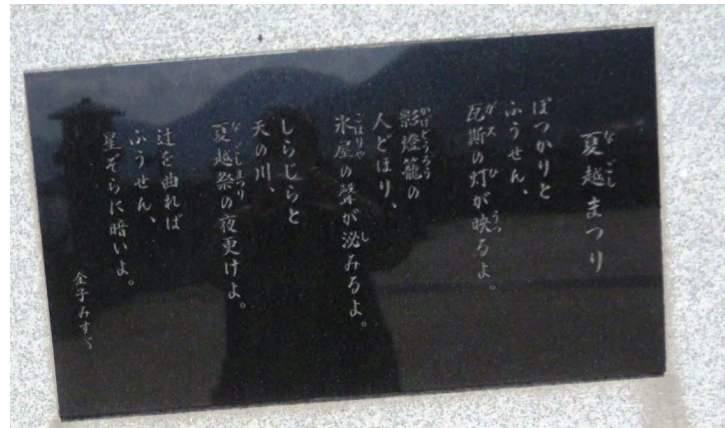


「夏越まつり」の碑



亀山八幡宮境内

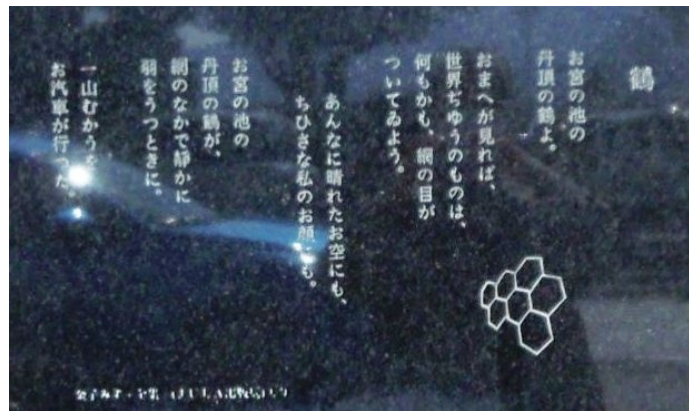
亀山八幡宮では、今年の7月29日(土)～30日(日)に行われたようですが、30日の花火大会はどうだったのでしょうか？ということで、この詩も下関を綴ったものです。



夏越まつり

■ 黒川写真館跡

亀山八幡宮の鳥居の左側、現在の駐車場に「黒川写真館」がありました。句碑は「鶴」でした。これも亀山八幡宮を綴ったものだと思います。みずゞは仙崎と下関しか知りません。



三好写真館跡の記念碑と「鶴」

■ 「金子みずゞ からと商品館」と「みずず化粧品店」

商品館は閉鎖され、倉庫になっていましたが、サンリブ内みずず化粧品店は頑張っていました。



金子みずゞ からと・商品館



みずず化粧品店

■ 梓書店と「金子みすゞの110年」

12日(日)に歩いたときに気になっていた、田中絹代ぶんか館前の「梓書店」を23日(木)に訪れました。「金子みすゞの本があります」と書かれていたからです。何種類かの本の中から、2013年12月20日に発行され、今年の3月10日に2刷が発行された「金子みすゞの110年」を求めました。税抜き2,000円でした。女性経営者の方は、たいへん懇切に説明してくれました。



梓書店



みすゞの110年

この本を読んで、今までに読んだ本の記事がいくつか間違っていることが分かりました。宮本啓喜との結婚を強力に勧めたのは義父の上山松蔵でした。また、みすゞの娘上村ふさえのインタビュー記事によると、上山文英堂を倒産させたのは、仙崎から出てきた、みすゞの兄の金子堅助でした(前回の文章中「堅」の字が間違っていました)。ふさえは大正15(1926)年に生まれ、昭和18(1943)年3月女学校を卒業し、軍事徴用を70日間経験して交通公社に入ったが、祖母ミチが亡くなったから、正輔のいる東京で暮らしました。しかし、彼の奥さんが口うるさかったので家を出て、大阪にいる宮本のもとで昭和22(1947)年から昭和34(1959)年まで過ごしています。結婚して娘さんが一人おられます。

ふさえのインタビュー記事によりますと、祖母に育てられたのは、母が亡くなった場所ではなく、その年の秋に新築した西南部の少し離れた場所だったそうです。下関の案内図に場所は明示されていませんが…。

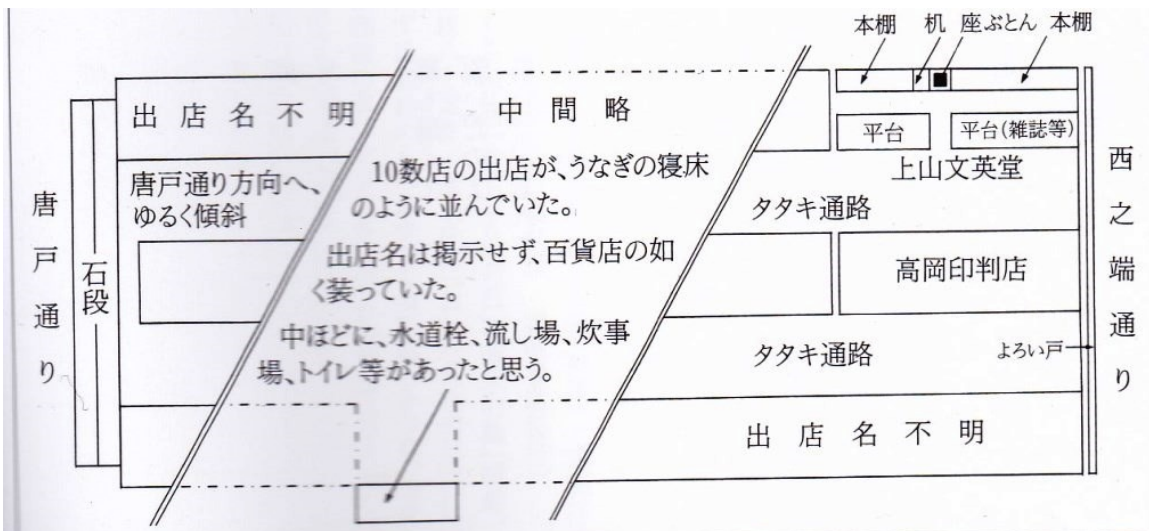


堅助(5歳頃)とテル(3歳頃)



昭和5年秋に新築された上山文英堂書店

関係者の記憶に基づく、西の端商品館内の上山文英堂の様子が載っていました。



商品館平面図／正祐と、みずぶ没後に店員となった西田実の記憶によって描きおこしたものの。

西之端商品館内の上山文英堂の様子

日新中の同期生伊村鈴子さんが近くに住んでおられることを思い出し、女主人にお宅を伺いましたら、すぐ傍でした。おまけに「おばあさんは百歳になられるのですが、金子みずぶを知っておられますよ」とのことでした。鈴子さんを訪ねて伺いましたら、昨年百三歳で惜しくも亡くなられたそうです。

■ 「星とタンポポ」

唐戸の街を歩いていると、閉鎖された店舗のシャッターに描かれた「星とタンポポ」に出逢いました。防大同期生の A 君が好きな詩です。



閉鎖された店舗



星とタンポポ

おわりに

24日（金）、春日市の母に会い、夕食のおかずを買うために唐戸でバスを降りましたら、唐戸公園のイルミネーションが目に飛び込んできました。これを眺めながら、「下関の借家は12月末にお返しするため、もうこれからは下関でゆっくりできなくなるなあ」と思うと感無量でした。「下関再発見」もあまり書けなくなります。

四年間、13回にわたってお読みいただき、有難うございました。

下関よ、永いあいだ有難う！！



唐戸公園のイルミネーション

<参考文献>

「金子みすゞの110年」 矢崎節夫監修 JULA 出版局 2017年3月10日 第2刷

(おわり)